北海道の戸建住宅及び集合住宅における犯罪誘発空間の調査研究と改善案の提案

～北欧デンマークに倣う自然監視型住環境に向けて～

東海大学芸術工学部准教授　　藤森　　修

■1　はじめに

□1.1　本研究の背景

私は今まで「デンマークの社会と建築」を研究してきました。デンマークでは貧しい国や戦争から逃れて入国する移民や、アジア諸国からの養子制度を受け入れている状況があります。小国の中に多くの文化が交錯し、一部では過激な思想の活動が表面化しています。北欧では建築家も社会に向き合い、これらの問題を取り扱うべき職能として考えられていると判断しました。近年、わが国で生じた児童が誘拐されるなどの事件において、たとえば同種の事件が北欧で生じた場合では犯罪の温床となった「都市や建築」をつくってきた建築家にも責任が問われると聞きます。

強盗・殺人・失踪(拉致)など、近年わが国の住宅地や集合住宅での事件が多く報道されていますが、これらの住環境は「どこでもありそうな場所」ゆえに、社会への衝撃は大きかったと思います。

また、私も現在まで幾つかの犯罪被害、盗難や住居侵入の被害経験があります。好奇心と自身の分野の開拓の目的で、日本や海外において意図的に住まいを変化させることにより得ることができた経験を通して、こうした過去の被害は建築の工夫によって防げるのではないかという思いが抱いてきました。一方で首都圏に見られる高級住宅地にて、防犯カメラが取り付いた閉じた外壁が連続するだけの「閑静な住宅街」は、近寄りがたく、また外部に誰の「目」も向けられないことで、通行人の体感治安を悪化させていると考えます。それでは犯罪自体が単に近隣や他の地域に「転移」するだけで根本的に解決しないのではないでしょうか。人が生きるうえで社会に対する義務と責任があります。北欧デンマークの住宅地は、周囲を散策することで楽しい気分にさせられます。本研究は最新のセキュリティ技術による防御法によって一時的に犯罪を抑止させたり、その威力を否定したりするといった研究ではありません。

異常な数の住戸が水平・垂直に反復する巨大で殺風景な集合住宅があります。ここを住まいとする人間がその建物と直面するとき、圧倒的な建造物を前に自らの小ささに気づき、反復を繰り返す他の住戸と自らとの差異を見出せずに、人間としてのアイデンティティを喪失させるのではないか、という疑問があります。また、こうした心理的な悪影響は姿を変え、犯罪に繋がるのではないかと思うのです。建築家の職能の根源に関わる「社会と建築」というテーマでの研究は本研究の基盤であると考えます。

□1.2　研究の契機

私の拠点である北海道では、冬の寒さが厳しいため、建築の内部の快適さを高めることに多くの努力が払われてきました。断熱効果のため北側には窓はなく、最近では敷地境界に並ぶコンテナ風の車庫が目立ち、冬は除雪された雪山と共に見通しの悪い「死角」を生み出しています。住宅内部から外でおきている様子を見ることはできません。旭川のある機関の報告によると、この「死角」エリアには子供も恐怖心を持っており「知らない人に声をかけられたことがある」と答えた児童が多かったといいます。若い女性が犠牲になる犯罪にも悪用される危険があります。一方、集合住宅に関しては、道内には首都圏にありがちな高層型マンションがつくられています。建物を周囲から閉じ、監視カメラで見守るといった方法が見られるようになりました。家が閉じることで外部には「死角」が生み出されています。ここには安全な環境を追求したがために、他者を疎外し、自分の住環境だけよければいいといった無責任な姿勢を見ることができます。

監視カメラの据えられた玄関ロビーから一歩外に出ると人気がなく、敷地周囲は「匿名的な空間」です。仮にヨーロッパのような多文化の環境では犯罪を呼ぶ空間といえます。快適な住まいの追求は、時として周囲に「犯罪を誘発する空間」を産み落としてしまうことがあります。戸建住宅地においても、外敵を遮断する目的で周囲を壁で囲まれた「高級住宅地」と、「刑務所」が類似している事実は明らかに建築計画上の破綻を示しています。

デンマークは北海道と気候・風土・文化が似通っており、北海道とほぼ同じ国土面積の北欧の小国です。デンマークの建築家は 1960 年代まで無機質な高層棟が立ち並ぶ集合住宅をつくってきました。これらの住環境は日照はよい一方で、6 階建以上の高層住宅での犯罪率は高く、住人による共用空間の自然監視がされにくくなり、住人同士のコミュニティも希薄になることという認識を経て、やがては「非人間的な環境」を生むという反省の末に衰退していったことがわかりました。建築家の責任感のもとで新たにデンマークで実現してきたのが「低層型集合住宅」です。これは単に低層であることで解決したわけではありませんが、現在もデンマークでは過剰な防犯設備を住環境に導入していく傾向はなく、あくまでも住人同士が状況を見守る（自然監視）ことができる「建築計画」が提案され続けてきています。監視カメラに依存した住環境では、住人は安心感を得るのではなく、住人の不安を扇動するとも考えられます。

本研究では、住人同士による「自然監視」に重点を置き、犯罪誘発を退ける北欧デンマークの事例を、わが国の状況と比較しながら視察・研究することを目的としています。

また本研究では北海道旭川における体感治安の好ましくない立地において、私の所属する大学の研究室にて学生主導により犯罪抑止の建築提案をまとめました。特異な環境における提案ですが、これは住人によるコミュニティに根ざした「自然監視」に重点を置き犯罪誘発を退ける北欧・デンマークの事例を参考としながら、北海道らしい快適で安全な住環境の代替案となると考えています。

□1.3　研究方法

本研究では警察や防犯協会、集合住宅等の管理組合、住宅販売の不動産会社などへの質疑・協力により多くの有益な情報を得ることを考えていましたが、本研究の性格上、様々な不利益を生じることより、情報収集は容易に進みませんでした。調査対象の所在地・詳細名称を公表しないことや情報機関の未公表を条件に幾つかの情報を得ることができました。

デンマークにおいては現地建築大学の教授より本研究における有益な視察先のアドバイスとデンマーク住宅建築の潮流と変貌のミニレクチャーを、現地に永住されている日本人の方々より近年のデンマークにおける「住宅環境を背景とした社会的な問題」に関する貴重な情報提供を得ることができました。デンマークでの視察先にお住まいの方々からも貴重な情報をいただくことができました。

北海道における調査

（調査時期：2009年5月～7月及び積雪時の12月）

ここでの調査は「戸建住宅」と「高層型集合住宅」を分けて行いました。

A) 集合住宅の調査（エレベーターつきの高層型住宅を対象　築年数は問わない。）

B) 住宅地における戸建住宅の調査（道内の研究者・建築家より紹介依頼により選定）

東京及び近郊の戸建住宅・集合住宅の文献調査

（※調査時期：2009年8月～9月）

最近話題で継続的に建てられている東京の湾岸エリアの集合住宅や著名な小説家の作品舞台のモデルとなったといわれる高級マンション、残虐な殺人の舞台となった集合住宅を視察・調査しました。

また、研究者を含む周囲の人物が被害者となった物件も視察・調査しました。

デンマークの戸建住宅・集合住宅の文献調査

（調査時期：2009年7月～9月）

デンマークの建築誌dk arkitekturの過去5年間のバックナンバーより調査を行う。

専門書籍に関しては所属機関である東海大学の図書館及び資料室を活用しました。

大学にて取引先の洋書専門店よりデンマーク出版社の専門書を取り寄せました。

デンマークでの実地調査

（2010年2月中盤より2週間滞在）

本研究に適切だと思われる研究対象地（住宅）をピックアップし、訪問が可能であるかを調べました。住宅と犯罪を扱う本研究はデリケートな問題を抱え、場合によっては人種差別にも繋がることを危惧しました。現地知人を通して視察先に関する安全確認を得ることに努めました。

■2　プルーイット・アイゴー団地

近代都市計画法の失敗を犯罪誘発の視点で述べた著書として J・ジェイコブス著「アメリカ大都市の生と死」（鹿島出版会）がある。都市計画とは人間生活を操る計画である。人間が犯す犯罪について、巨匠の近代的都市計画術と絡めながら因果関係を追及する姿勢は痛烈に繰り広げられている。ジェイコブス氏は、近代都市計画の理論ではスラムと定義される住宅地での生活、とりわけ路地における子供の遊びを、生き生きしたものとして肯定している。一方で完璧な人工環境をゴールとした近代都市計画は単なる「巨人のチェス遊び」であると発言している。

「低所得者のための住宅計画案は、彼らの現状にとって変わるものと提案されたはずなのに、現在ではスラムよりももっと悪い、犯罪、バンダリズム（破壊行為）およびいわゆる社会的虚無状態を作り出す温床となっている。」

近代的な都市計画法であるスーパー・ブロックによる開発は、わが国では聞きなれない方法だが、通りの街路から背を向け、内に閉じて、内部に子供の公園等が設けられる方法をいう。計画者が内部に公園を設けたとしても、疑いなしに利用者がそのように使うという考えが破綻しており、一般的に危ないといわれる路地よりも、ブロック内に人工的に計画された公園のほうが少年犯罪が多いという。

イギリスの建築批評家　チャールズ・ジェンクスの著書「ポストモダニズムの建築言語」（1978 年）の第一部は「モダニズム建築の死」である。そこでは建築家ミノル・ヤマサキが 1952 年から 1955 年にかけて計画したアメリカ　セントルイスの「プルーイット・アイゴー団地」に向けられている。本書に掲載された団地は今にも崩れかける瞬間のショットと（後に意図的にダイナマイトで爆破されたことを知るのだが）、廃墟の姿であり、これが設計競技で選ばれ、米国建築賞を受賞したという作品のイメージから程遠い扱いである。本書では「プルーイット・アイゴー団地」が爆破された 1972 年 7 月 15 日午後 3 時 32 分をモダニズム建築の死として位置づけられ、広く建築界に影響を与える結果となった。14 階建ての高層集合住宅は当時の進歩的な方法論によって計画した意図を裏切り、黒人居住者による犯罪を誘発する結果を導いたという。この団地の犯罪発生率は他の開発団地より著しく高かったようだ。

「まもりやすい住空間」の著者オスカー・ニューマンによると、守りやすい空間の基本原則として〈領域性〉〈自然監視〉〈境界の画定〉を挙げている。

「領域性」とは、住人が縄張りを感じられる場であり、そこでは空間に対して責任感が芽生えるという。住人の愛着が感じられる場には犯罪企図者の行為を抑止させる効力があるという。「自然監視」とは住人が外部環境を責任・義務を持って眺めることをいう。ここでは主として建築の開口部が問題となる。

「境界の画定」とは、パブリックスペースとプライベートスペースとを明瞭に区分することによって、曖昧で匿名な空間の余地を避けることをいう。そうすることで犯罪企図者が立ち入りにくい効果があるという。ニューマンによるとプルーイット・アイゴー団地は、長い廊下、匿名性、整理のゆきとどいた公私共用空間の欠如が失敗を導いたと指摘している。

不運にも設計者のミノル・ヤマサキの作品、ワールドトレードセンターは 2001 年 9 月 11 日のテロの標的となり、黒煙に包まれた映像は建築界に衝撃を与えた。

これらの 2 つの衝撃的な事件は、黒人による犯罪とテロという異なる事件とはいえ、われわれに防犯への意識を高める契機になったと考えられる。おそらくわが国では、今でもこれらの問題は、米国という特殊な環境における対岸の火事と見なすかもしれない。だが、近年わが国で生じてしまった残虐な事件の数々を考えると、建築やそれを取り巻く環境の弊害が体感治安を悪化させ「犯罪を誘発した」のではないか、と考えさせられるのである。

■3　本研究が扱う犯罪

住環境の内外における犯罪を抑止させたいという目標を掲げる本研究にとって、たとえばサイバー犯罪や麻薬再犯率の問題を解決したり、抑制したりすることはできない。

だか、住宅地の様相が死角を生み出すことで麻薬売買の温床になった事件は記憶に新しい。

今後の研究の継続と発展が必要だが、建物が住人に与える精神的障害はありうる。そこから犯罪を萌芽することもありうるだろう。このあたりの内容については、道内の精神科のドクターとの質疑・対話を心がけた。

「犯罪白書」※平成 21 年度版の「窃盗・覚せい剤事犯に係る再犯の実態における直接的動機・背景事情」を見ると、男子、女子とも建物（住宅）に関わる直接的キーワードは見当たらないが、動機の「ストレス解消」に関しては、建物がストレスを助長するという点ではあながち建築とは無縁ではないだろう。児童虐待や保護責任者遺棄も「ストレス」が原因のようだ。

現代社会の目指す「犯罪者を生まない社会の構築」を、いささか乱暴であるが建築に置き換えたい。「犯罪者を生まない建築の構築」。住環境においてはコミュニティが生じにくい現代社会に迎合する形で、マンションや戸建住宅においても隣人との関係、周辺環境との関係を断ち切るようなものが目立ってきている。

「犯罪白書」が問題視するキーワード、「社会とのつながりの希薄化」「孤立化」「社会への帰属意識」に対して現代建築は助長・加速させているのではないだろうか。

体感治安や不安感を助長させる不健全な試みが現代建築の設計法に含まれているものとして考えられる、という仮説は本研究の出発点となっている。

本研究が扱う犯罪の種類を「犯罪白書」を参考とし次のようにした。

・落書き
・破壊行為・器物破損・バンダリズム
・不法占拠
・住居侵入・忍び込み
・空き巣
・侵入窃盗
・強盗
・殺人
・窃盗
・誘拐
・強姦・強制わいせつ
・強制わいせつ（子供・児童を含む）

■4　調査方法

□4.1　調査対象に対する着眼点

a）集合住宅

・集合住宅の住戸全体の分類（グループ化）の方法の工夫点の発見。
・集合住宅の配置方法の工夫。敷地内の残余空間（広場）の特徴。住人の滞留活動の状況。
・敷地内広場の公共性について。地域との関係や部外者の侵入などの問題。
　子供の遊び場としての活用など。
・敷地内広場が住人のなわばり意識を感じられる工夫があるかどうか。
　誰のものでもない、匿名的空間となっていないか否か。
・入室できた場合、住戸から外部の状況をどのように監視できるのか。（防犯に対する自然監視の状況把握）
・前面道路より、エレベーターホールや郵便受け周囲の不審者が自然監視できるかどうか。
・電子監視システムやオートロックの活用状況

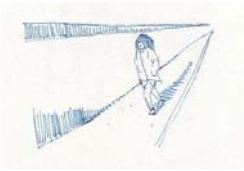
b）戸建住宅

・前面道路に並ぶ「室内型」車庫が生み出す死角空間の状況把握。
　車庫が住宅内部の居室から前面道路を自然監視する際に障害物となっていないか。
・前面道路と敷地との象徴的・物理的障壁の有無について。
・隣家との障壁の有無の把握。
・北側道路への自然監視の状況把握。
　住宅の北側に窓は設けられているか。防寒の目的で外界から無責任に閉じていないか。
・雪による監視障害の状況把握（北欧及び北海道）

□4.2　調査に使用するキーワード

以下のキーワードは環境の良し悪しを判断する「基準」として機能するのではなく、視察対象となる建物の状況を分析するためのキーワードとして幾つか設けた。

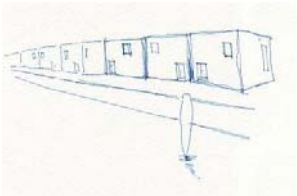
【死角】blind corridor, blind spot, blind corner を有するもの
【監視障害】住人、隣人、通行人により視線の存在の障害。隣家、塀、雪山なども含む。
【体感治安性】本能で危険・安全を感じる状態



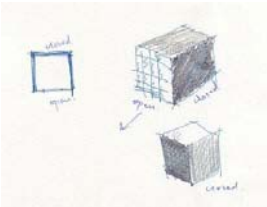
【体感監視】【体感視線】守られている視線（自然監視）を感じるもの

【無人の場所】no-man-space　誰も居ない場所　人気（ひとけ）を感じない場所

【優位性】dominant position, dominant sense
空間・視線の支配に関する優位性。
「住戸内部」と「外部道路（通路）」との優位性のバランスに注目する。



【格差性】differences　建築構成の表と裏があるもの。



【閉鎖性】建築の状態が閉じている。自閉症。

【開放性】建築の状態が開いている。透過性。

【明白性】建築の組み立て・構成・方法論が安直で率直すぎるもの。外部より内部の仕掛け・状況が見通せてしまうもの。

【混乱性】建築の組み立て・構成・方法論が複雑で外部より構造が判りかねるもの。

■5　北海道における調査

□5.1　旭川における調査

（以下、調査対象の物件に不利益が生じるため、詳細データは省略します。）

市内中心部の集合住宅

実質的な住環境はさておき、互いに監視し合う 2 つの集合住宅。雑多な環境と計画性の欠落が思いもよらない住環境を実現させている。

ただし、足元の空間的処理は肯定できない。
まるで住宅の基壇のようである。
駐車場に面するとはいえ、開口部のない壁面は周囲に死角を生み落とす。
幸いに交通量のある 2 本の道路に面するものの、この壁面には改善が必要。

前面道路に閉鎖的なファサード(表情)を向ける賃貸集合住宅が目立つ。
透過性のないガラス窓ははめ殺しが多く、周辺環境から縁を切っているように見える。
内部空間に光さえ届けばいいという、無責任な姿勢か。

近隣住宅や屋外環境(街路、オープンスペースなど)から絶縁するような戸建住宅が目立ってきた。不動産広告から判断すると道内だけの傾向ではない。

古いコミュニティの残る住宅地に若い世代の戸建住宅が計画される場合、窓の少ない閉じた住宅は、「覗かれない」という理由で敬遠されるどころか歓迎される意見もある。新住宅は古いコミュニティから距離をおくこともできる上、開口部を多く持つ古い世代の住宅がプライバシーを損なう機会もないという相互効果があるのだろう。

集合住宅内の中廊下に面する玄関扉の連続のような住宅地にはヒューマンアクティビティを生む機会がない。

旭川市に建てられたモデルルーム

これは端的な事例である。

近隣住宅の住人に尋ねると、家を覗かれないからと歓迎しているようであった。

前面道路に面して玄関戸があるだけである。側面にスリット状の換気窓があるのみ。採光は天窓である。たとえ犯罪企図者が侵入できなくとも、この住宅周りに死角を生むことで防犯住宅とは言えない。

無責任な要塞である。

これは南国の若手建築家が設計したプロトタイプが風土を無視し、全国で展開しているという。

このような住宅が求められる背景は判りかねるが、社会の中で人が住むことに対する、街への責任すら放棄されていくのである。

集合住宅の接地階における状況。上階との違いが見られないベランダの手すり。

「地盤面」と「1 階住戸」とのレベルが近いことに対する防犯上の解決は容易ではない。

北欧では半地下に共用のユーティリティを納める事例が多く、そのため 1 階の住戸は半階上げられるがわが国では各世帯でユーティリティを持つのが常識である。

この場合、専用庭を与え外部に張り出したテラスを計画することで、通行人よりも住戸の「優位性」を強調させなければならない。本ケースと似た状況下で、旭川において家庭菜園を持つ事例が見られた。この事例では通行人に優位性を与えてしまっているようだ。

公営団地の典型例（旭川）
住棟の妻面には一切の開口部が無い。（写真右）

老朽化した団地の場合、エレベーターが無いために特にエントランスホールは設けられていない。北側の開口部は限られ、屋外倉庫と住棟に挟まれた部分は自然監視を逃れ危険な領域となりやすい。

見知らぬ人も住人に紛れて何の抵抗も無く住棟に侵入しやすい。

極端に細長いスリット窓
外部の状況を一切見ることができない。

道内の戸建住宅のトレンドは明らかに東京に由来するであろう。

建築が風土と密接にかかわるという常識を逸脱している。

2 階リビングから前面道路を自然監視することはできるものの、通りから住居内部の状況を一切見ることはできない。

わが国の建築界では前衛的な建築家が 1970 年代以降、自閉症的な作品を実現させてきた。

都市からの撤退によって、戸建住宅にミクロコスモスを内包させるといった作品は多くの建築家を魅了させた。敷地の文脈から離れて、異なる世界を住宅の内部空間に与えたのである。

この現代住宅にもその弊害を見ることができよう。

集合住宅の事例

住戸内部より見る。建物の陰となる空地への「自然監視」を担う。

どこからが、住区のはじまりか、心理的に与えることで犯罪企図者を遠ざけるであろう。舗装の連続も変化させることが望ましい。写真右の自転車に面する壁面にも透過性の高い開口部が必要と思われる。

見通しのよいエレベーターホール。郵便ポストの位置も死角とならない。浅築とはいえないものの、現代的な防犯上のルールに基づく。

低層部における家庭菜園の展開は、洗練されたデザイン法によるものではないが、前面道路から覗き込まれる弊害を和らげている。一連の住戸は前面道路の通行人に「優位性」を決して与えていない。

旭川市内の高層型集合住宅

隣接する駐車場をブロックするように低層部に一列に並んだ独立倉庫群と、ピロティ形式の駐車・駐輪スペースに挟まれた空間は自然監視がなされていない。
こうした空間は体感治安がよろしくない。
またこのように前面道路よりエントランスに向けての経路が折り曲がることによって、玄関ホール内の状況がどこからも自然監視されない障害を招いている。

旭川駅周辺の集合住宅（2 棟）の事例

旭川駅近郊の浅築の集合住宅（上空より俯瞰）
同規模のマンションが 2 棟並ぶ。
足元周りには植栽とレンガ色の舗装により私有地であることを暗示させる「敷居のデザイン」が見られる。

新開発中のエリアのため前面道路の交通量は少ないが、開放的なエントランスロビー内は自然監視の機会が期待できる。この建物 1 階には住戸が設けられていない。

1 階低層部の住戸テラス（専用庭）をガードする隔壁。要塞のような様相。
防犯上と思われるが、犯罪企図者に一度乗り越えられてしまうと歩道からの監視障害となり、防犯の役割を失う。
デンマークのテラスハウスでの事例があった。
北欧では低層住戸を半階上げることで通行人との視線を交わす方法が一般的である。

敷地北側も車道に面しているが、2 棟共に室内型駐車場の低層部のみ面しているのがわかる。

開口部のない壁面が道路に沿って続くだけの風景は住人のアクティビティを生み出さない無人の場所と化す。
南北格差のデザインはわが国のこの規模の集合住宅によく見られるが、北海道における車社会の弊害が駐車場という巨大なボリュームとして現実化されることで周辺環境を悪化させているのだろう。

旭川の典型的な新興住宅地

住戸外部の屋外環境に対して何らかの定義も見られない。
均質な方法で並べられただけの配置方法は屋外環境を硬直化させている。
各住戸の外壁の色彩は統一感を逃れているものの、退屈な景観である。
幸い、塀や過剰な植栽が無いために、各住戸は自然監視のやり取りはあるのだろうか。
最小限の開口部もいずれカーテンで閉じられるであろうか。
これだけの敷地面積に恵まれているのであれば、北欧デンマークの事例「キンゴーハウス」のようにテラスハウスの方法も展開できたのではないだろうか。

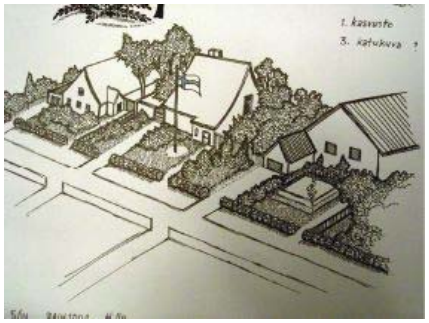
新築住宅では室内型独立車庫をよく見かける。
通りを歩くと、車庫が監視障害となり住戸の開口部がまったく見えないことも多い。子供の状況など危険を察知しにくい原因となる。

建物に車庫を組み込むことで道路への監視障害を回避。
街並みとしても美しい。

道内の新築戸建住宅には見られなくなっているガラス張りの風除室（玄関前室）。
前面道路を歩く者が「誰かから見られている・守られている」という、安堵感を与える効果があるのではないだろうか。
後述するが、都心の集合住宅の共用廊下にて、このような効果が提案された事例がある。

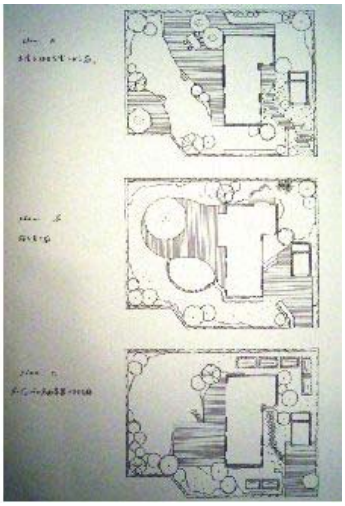
1990 年代に東京の閑静な住宅地にて外国人による覚せい剤の売買が行われていた事件は衝撃的であった。麻薬と住宅地というかけ離れたイメージであったが、日本の住宅地が抱える、死角の多い環境が導いた事件であったという点で、本来なら建築家の責任も問われるべきであろう。

旭川の典型的な戸建住宅の例。比較的浅築と思われる。
北側ということで最小限の開口部のみ設けられている。
おそらくユーティリティの開口部と思われる。
こうした「わかりやすい」建築構成は盗難などの犯罪企図者に対しての防犯対策として欠陥である。
手前の土地は販売中ではあるものの、背後の住宅からの自然監視は一切行われていない「無人の場所」となっている。
積雪による監視障害をも引き起こしている例。



フィンランドからの留学生が描いた典型的な住環境。
限りなく低い生垣をセットバックさせ設けている。
住宅内部から街路で起こっている出来事、子供が遊ぶ様子、など、視認することができる。
道内では除雪の関係で関東圏で見られるブロック塀が見られないものの、閉じた住宅の外壁が障壁化していると思われる。

戸建住宅における屋外環境提案のバリエーション（学生演習課題より）
「凡庸な住宅地の景観」の代替案への挑戦
（周囲から塀で遮断する方法、前面道路からの監視障害となる庭園のデザインなどを疑う）



写真のように電柱には明らかにカメラの存在が確認できる。

この立地がとりわけ危険な地域というのではなく、公園に隣接した行き止まりの敷地であり、一部が土手でブロックされているといった体感治安の悪い立地条件のなかで、監視カメラにより住人の体感治安を改善させる方法がとられたようだ。

現在も新築住宅の建設が進んでいるという。

ゲーティッド・コミュニティで見られる「ゲート」こそは無いものの、その共通点は少なくない。

住宅地内部はカメラにより監視されているものの、残念なのは肝心の住宅は隣家や道路から孤立し、周囲を守ろうとする意識が感じられないものであった。

カメラによる威嚇より部外者を排除し住宅地の安全は守られるものの、居住者が周囲を守ろうとする姿勢を萎えさせるという批判は、ブレークリー＆スナイダーの著書『ゲーテッド・コミュニティ』（竹井隆人・訳）に触れられている。この住宅地にて若者がゴミ箱に落書きをした行為が発覚し、監視カメラを分析し、その人物が通う学校まで特定できたという。監視カメラは住人の生活の質を向上させているのであろうか。

計画地と隣接した公園のエッジに建つ道内の建築家による作品。
住宅内部には周囲の風景を取り入れているものの、中庭を囲う閉じた表情を与えている。
周囲に対する自然監視の義務を果たしているとはいい難い。
立地が「セキュリティタウン」とはいえ、住宅の構成に新しい兆しが見えない。

監視障害となる独立車庫、工業製品による閉じたフラットルーフ。隣家や道路、空き地に対して何ら配慮がとられていない状況は旭川のどこにでもある新興住宅地との違いが見当たらないのが残念である。監視カメラの取り付いた道路はまるで殺風景なマンションの中廊下のようだ。

旭川市大規模公営集合住宅

外観　バルコニー側
高層棟に隣接して中高層が増築している

外観　共用廊下側
一部窓廻りにおいて色彩による変化が見られるが、無機質な印象である。
手前に駐車場と倉庫、児童スペースが設けられている。

歩道と建物との間の緩衝スペース（写真のグリーンの部分）が単なる残余スペースとなっており活用されていない。1階住区ベランダの手すりが高層階と同じ仕様である。緩衝スペースと合わせて防犯上（空巣・盗難など）の工夫が必要と思われる。

最上階から俯瞰した児童用のスペース。
駐車場と鉄道高架、隣接する寺院の森に挟まれた位置。
前面道路や住区からの自然監視のなされない場所であり、単に機能の充足目的によって決定したようだ。

住棟に隣接して並べられた倉庫

エントランスロビーより道路を見る。
ガラス面が大きく、周囲からロビー内の様子が監視できる。

ポストは外部より見通しのよい位置に設けられている。

大規模集合住宅とはいえ、グループ化は一切行われていない。
隣人関係を希薄化させるホテル同様に、共用廊下がすべての住区を結び付けている。
人間的なスケールを逸脱している設計処理である。
１階の共用廊下は、倉庫の連続により視界がブロックされている。（写真右）
駐車場への監視障害を引き起こしている。

各階のエレベーターホールを見ると、無駄なスペースが目立つ。1 階では掲示スペースなどの活用があっても上階では匿名の場所となっている。誰からも監視されず、住人の守ろうとする意識も芽生えることはない。このような曖昧な定義の場所こそが犯罪を誘うと思われる。東京での調査のなかで、同類の場所がホームレスなどが立ち寄ったり風紀を乱すなどの事例があった。

□5.2　改善提案　旭川市公共集合住宅

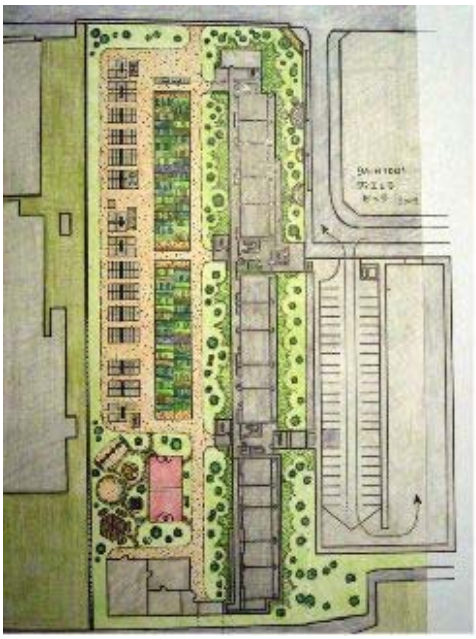
東海大学芸術工学部「ランドスケープデザイン演習」にて、北欧からの留学者を交え、先述の公営住宅における屋外環境のデザイン提案に取り組んだ。

以下の項目の改善を目的とする。

・住人のアクティビティの活性化
・オープンスペースの充実
・無機質で均質な屋外環境の改善
・自然監視で守られる児童広場
・前面道路と住戸との相互自然監視の関係

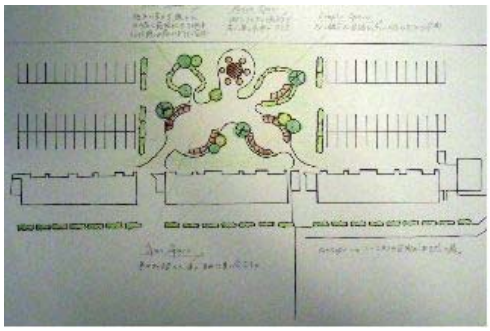
既存状況モデル

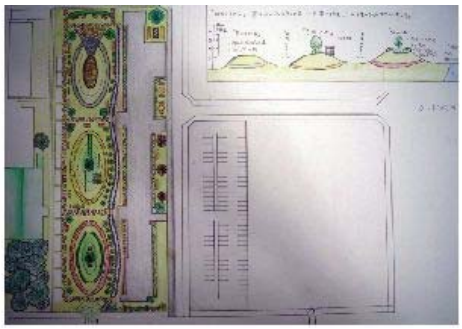
提案作品例



住棟から倉庫群を遠ざけることでスペースを確保し、家庭菜園を提案。
既存駐車場の代替案として隣接の敷地に駐車タワーを提案。
緩衝帯に植栽とベンチ等が加えられた。

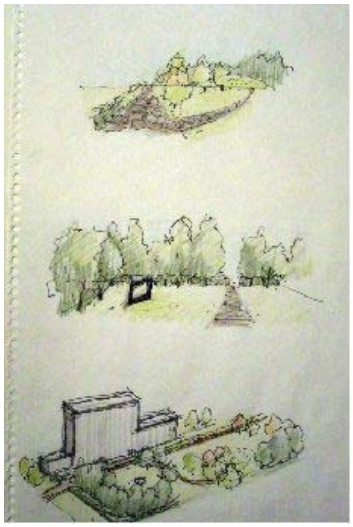
提案作品例





両案とも巨大な住戸数を３つのグループに分割させる意図がある。
住人同士の顔見知りの機会をつくることを目的とする。

遊具等をデザインすることで屋外を活性化する。
設置する場所も大人の目に触れる機会のある場所が検討された。



ここでは倉庫、駐車場を移設させることで幾つかの性格の異なる庭園を提案している。
隣接する民間の中規模集合住宅からの自然監視を受けることを前提としている。

□5.3　札幌（一部近郊）における調査

建物のジェスチャー

住宅地のエッジに建つ戸建住宅の事例。
鬱蒼とした林に面している立地は決して良好ではないものの、閑静な環境である。
前面道路に面した住宅のファサードには最小限の窓しか設けられていない。
前面道路を孤立化させ、ここを通ると誰からもどこからも監視されていないことに気づく。
新築の物件も見られるが、まったく同様のジェスチャーで「常識」に倣っている。
体感治安は著しく悪い。
建物が「要塞化」することで、かえってこの環境を悪化させているのではないだろうか。
道内に限らず、住宅地のエッジにはこのような事例が目立つようだ。

かつて空き地には建物が建っていたかどうか定かではないが、写真左の住宅はその内部構造を周囲に曝け出している。
建物の組み立て法として「表」と「裏」の格差が明らかである。
窓をカーテンで覆う行為がプライバシーの確保ではない。
犯罪企図者に家の内部構造をわかり難くさせることも必要ではないだろうか。

擁壁で押さえられた住宅地のエッジの状況。
歩行者は車道からの監視にのみ救われている。

オープンスペースに面してるとはいえ開口部がほとんど設けられていない。

住宅地の中で一軒だけ閉じた住宅。
周辺環境より日照と通風、借景を享受し、ひたすら閉じる姿勢を保つ。
今後の予測ができない空き地に隣接していることで、高い塀で取り囲む防御の姿勢が見て取れる。周囲を自然監視する義務を放棄している。
犯罪企図者が塀を乗り越えてしまえば、周囲からそれ以後の行為を見られることはないだろう。

札幌の新興住宅地

独立型倉庫や車庫が前面道路に面して連なった景観は道内のどこでも見られるようだ。
ボリューム相互の組み合わせは死角を量産し、住戸内部からの前面道路への視線を妨害している。
部外者はためらいなしに人目を気にせずにうろつく事ができる。
住宅地を走るこの前面道路は、非常に閑散とした何も生み出さない殺風景なデットスペースになっている。

アースカラーの色調で統一した良好な住宅地である。

車庫も建物に組み込まれ、道路への見通しも格段とよい。

ここでは歩行者専用の緑道に注目したい。

緩やかにカーブする緑道沿いに彫像、街灯、ベンチが設けられており、住民に利用されている姿が散見できた。住宅は緑道に対して最低限の開口部を設けているものの、生垣や植え込みの高さ、樹木などによる監視障害も目立つ。

緑道から防御するように住宅が閉じることで、緑道の通行人（犯罪企図者）に対して空間支配の優位性を与えてしまっている。

緑道から住居へのアプローチを設けたり、犯罪企図者が身を隠すことに貢献しがちの植え込みの高さを押さえるなどの工夫が必要と思われる。

緑道を守ろうとする意識によって住宅をプランニングすれば、防犯上も良好な住環境になるであろう。

住宅からの自然監視を妨げる樹木

死角となるコーナー

植え込みが緑道と住戸を隔離させている

道内の建築家、計画家より紹介された札幌の住宅地である。
景観賞が与えられたという良好な住宅環境であるが、本研究の文脈に照らし合わせても興味深い事例であった。

車庫は建築に組み込まれることで前面道路への監視障害となることを回避させている。

最小限の塀こそは見られるものの、建築の一要素としてみなされデザインされている。

一連の住宅同士に共通した色彩、構成、様式はないものの、緩やかな統一感は「隣家への意識」が感じられる。まるで「連歌」のように戸建が連なるように構成されているようだ。

統一されない緩やかな規律で穿たれた開口部の連なりはさまざまな方向から、距離感から道路を見守っている。他の同規模の住宅環境と異なり、道路よりも住宅に「優位性」が与えられているようだ。

北欧での事例「ティンゴーン」と共通する質を持っていると思われた。

多様な開口部の位置にはルールがない。通行人はさまざまな方向から「見られている」意識を持つだろう。これは住人が環境を守っているという意思表示になる。

カーテンを閉め切らない開口部は、通行人に空間支配の「優位性」を与えない意思表示でもある。

道内における小規模集合住宅(4 住戸)

一見ランダムに設けられた開口部は、内部空間と窓との「厳密な対応関係」を回避することで各住戸の分節・範囲を分かりにくくしている。犯罪企図者に対して対象物が全体把握されることを回避させているといえよう。つまりどこが侵入すべきユーティリティの窓であり、リビングの窓であるのか理解しがたい状況となっている。
従来のこの規模の集合住宅であれはその内部構造は一目瞭然である。

近年（2000 年以降）このようなランダムな開口部の分散化は世界の建築界で目立っているが、集合住宅に限らず美術館などの公共建築にも見られる事例である。

■6　首都圏における調査

□6.1　東京（及び郊外）における調査

駅前広場に近い環境にある住宅地である。交通量の多い立地環境故に、周囲を遮音壁と植栽によって
囲われている。一見、内部が住宅地であることを感じさせない。
住宅地として特筆する要因は見られない、どこにでもありそうな新興住宅が並んでいる景観である。

住宅地の入り口には監視カメラの設置を謳った看板が多い。
一度住宅地から出てしまえば誰もが見知らぬ人となりうる駅前広場特有の環境に隣接していることで
採られた防御処置であろうか。
それでも体感治安がよく感じられない理由は、監視カメラによる物々しい威嚇が理由ではなく、住宅計画の工夫によって何もやろうとしてないこと。また周辺環境に愛着をもち守ろうとする意識がプランニングからまったく感じられないからだ。
自然監視の義務への放棄、監視カメラへの依存、周辺への無関心が見て取れる。

東京近郊の低層型集合住宅である。
駐車場を住戸近くまで引き込むことを避けることで、緑豊かな遊歩道が住戸に導いている。
2 階建ての住棟が幾つかのグループを形成しながら配置されているのが分かる。
各住戸には小さなガーデンを経てアプローチする方法が取られることで、通常の一戸建て住宅地で見られるような、閉じた表情を通りに向けることを避けている。
温室が置かれたり、デッキとして利用されたり、家庭菜園になるなど、通りに対して様々な表情を向けている。こうした街並みは、住人の「通り」への愛着と、ここを守ろうという「責任感」を犯罪企図者に伝達することで犯罪を抑止しているのではないだろうか。

子供の多い住環境だが、一部の緑地帯には死角が見られた。
住棟の前後に設けられた塀は高さが押さえられているとはいえ自然監視の弊害となっている。こうした方法は建設当初の「常識」であったと思われる。

駐車場を住戸から離れて設ける方法には、車上荒らしなどの犯罪を誘発する事例があったものの、このスケールの住環境にとっては明らかに最適解と思われる。

都内でも珍しいビオトープの公園に面する民間の集合住宅の例。中高層（8階建）の住棟が公園を自然監視している。公園内には監視障害となるような構築物、樹木等は少ない。現在、公園内を安心して散策できる良好な環境となっている。
仮にこの住棟がなければ、この公園は病院と目黒川の遊歩道に面しているだけの、人気のない危険な公園になっていたと思われる。

見通しのよい芝生広場。
住棟からの視線を感じることで非常に安心できる良好な事例。

物流センターや倉庫に囲まれた地域に計画された高層型集合住宅。過度のセキュリティが非住民を遠ざけている。
室の多くが「単身用ワンルームマンション」という。住人を孤立化させ隣人との関係を重視しない「ホテル」化した集合住宅が目立っている。
カウンターにはスタッフが常駐しているロビー。生活感の微塵すら感じられない。
ロビーでの犯罪や盗難など皆無であろうが、決して本研究の好例とはいい難い。
周辺環境から孤立し、隣人から孤立する住環境において、果たして住人は精神衛生上安全な環境であろうか問いたい。

経済原則の徹底化は予想もできない結果を導いている。
「審美的な絶望感」はあるものの、防犯上有効な「結果」はないものだろうか。
ここには統一されたルールを破綻させる多様性がある。

東京の新築マンションのロビー
エントランスには庇が無いために、上階の住戸からの視線を受けることができる。
ロビーから前面道路への視線もよく通り、ロビー内部の状況も外部の通行人から視認できると思われる。植え込みの植栽は低木であることが望ましいのではないだろうか。
今後成長する過程での障害が気になるところ。

植え込みに邪魔されない玄関ロビー。夜間も明るく人物の動きが問題なく視認できる。

道路や駐車場に隣接する集合住宅の 1 階住戸の設計法には工夫が必要と思われる。
生垣でプライバシーを守るだけの付け焼刃の方法では居住環境も防犯環境も保障されない。
通行人と住人の視線が交わらない方法の検討が必要である。安易に 1 階を駐車場のみに限定すると、写真右のように誰からも自然監視されない歩道が無責任に続く結果となる。

「空室」の表示。わが国ではよく見られる常識であるが、欧米では無防備に「空室」を明示する事は避けなければならないケースがある。悪党が不法占拠し、アジト化し、犯罪の温床となる場合があるという。
東京渋谷の木賃アパートの空室が殺人事件の温床となったこともあった。
無条件に欧米へ盲従することの良し悪しはあるが、無防備で無責任な姿勢が犯罪を誘発することは回避したい。

ベンチや広場を周辺住民に提供する公開空地が駐車場に隣接していたり、上階の住戸の自然監視から逃れている場合、危険な空間に転化してしまう。

玄関ロビーまでの長いアプローチの弊害によって
玄関ホールの状況が周辺環境から見守られない。
若い女性を尾行し、玄関ホールで悪事を企てようとした
未遂事件が旭川でも近年に見られたという。

ガラス張りの視認性の高い玄関ホールが多く見られるようになった。
郵便ポスト周囲の人の行為も周囲から見られることを意識した設計がされている。

玄関ホールが「折れ曲がる」ことで多くの死角を生んでいる事例。
アルコーブ状の空間を利用した郵便ポストの設置、隣家とのわずかな隙間の活用（自転車置き場）は犯罪企図者が身を潜ます余地となり危険である。
また、エントランスを一箇所に集約化せずに、外部に出るためのサブエントランスの設置は犯罪企図者が玄関ホールに侵入しやすい弊害となる。

東京の埋立地には近年、多くの高層型集合住宅が実現している。
厳重なセキュリティをクリアすると、まるでホテルのようにフロントが配された玄関ロビーが用意されている。住棟に向かうには更なるセキュリティをクリアしなければならないという。
果たして東京の湾岸エリアは、ここまで過剰なセキュリティが求められるほど危険な地域なのであろうか。敵の無い戦いに挑んでいるようだ。
ブレークリー＆スナイダーの著書『ゲーテッド・コミュニティ』（竹井隆人・訳）によれば、ゲーティッド・コミュニティの型のひとつに「威信型」があるという。他と区別し、富裕層であることを確認するためのゲートといえようか。これはあくまでも高層型集合住宅であるが、その構造には共通点も多い。
過剰なセキュリティは防犯や犯罪抑止が目的ではなく、威信を確認する手続きともいえよう。

周辺環境の文脈をリセットし塗り替えるように暴力的なボリュームが屹立する。

共用廊下の様子。セキュリティを越えた先には明るく開放的な空間が展開する方法は無かったものか。井戸底のような吹き抜けと廊下が連続し玄関ドアが反復する要塞のような空間。隣人を拒絶し、コミュニティを無力化しているとしか思えない。
「あのウエストタワーを見上げているとき、なんですかね、あたし急にムラムラ腹が立ってきてね。
なんか、あの内側に住み着く現実の卑しい人間のこととか何も考えないで、すうっと格好よく立っているでしょう。あんなところに住んだら、人間ダメになる。
建物の格好よさに調子を合わせようとして、人間がおかしくなっちゃうって、そう思いました。」

『理由』宮部みゆき

「孤独」1944 年
エドワード・ホッパー

東京江東区の集合住宅である。オーソドックなプランニングによるどこにでもある「マンション」である。とりわけ建築の組み立て方には特筆すべき特徴が見られない。

ここではこの立地環境に注目したい。鉄道の高架が住棟を横切っている環境である。

鉄道の動的なイメージのすぐ横に「動かない」住棟が建つ。日々の生活の中で住人は、まるでプラットフォームから通過する列車を見送るときの「取り残された」かのような心理が働くのではないだろうか。

高架は環境を二分し、手前の市街地から高架越しに、物流センターの跡地であろうか、広大な活気の無い空き地を望むこととなる。匿名的な捨てられたような高架下の空地が延々と続く。

手前と奥の 2 つの世界を引き裂くように列車がけたたましく通過してゆく。

これらはあくまで「印象」であるが、行く手を阻むように、全てを否定されるような、閉塞感を覚える環境であった。

入居者と部屋の大きさから想定すると、これは単身者用の賃貸マンションであろうか。

このマンションは、近年に入居者が住人を拉致し殺害するといった事件の舞台になったという。

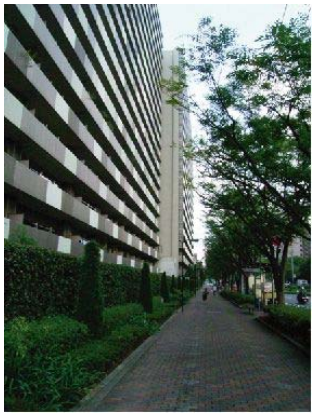
ここでは「部外者である悪党をいかに近づけないように工夫するか」、であるとか、「どのような方法で犯罪企図者を監視するのか」、を問うのではなく、建築環境が住人の心理に悪影響を及ぼすといった側面を問うべきでなかろうか。つまり建築が住人を犯罪者に変えてしまうといった側面に注目したい。

北欧のスラム化した住環境を見学した際、「建築計画の失敗」が住人を犯罪に加担させる機会を与えているのではと感じたのである。

閑静な住宅地に建つタウンハウス

前面道路よりエントランスポーチを見た様子。
ポスト・宅配ボックスは独立しており、小ボリュームの中に納められている。
周囲は住宅地のため、多くの自然監視の恩恵を受けている。
セキュリティのためのスチール製門扉は限りなく低く抑えられている。

住等棟を門扉手前より見る。
テラスハウスとして住戸はいくつかのボリュームに分割されており、住棟間の隙間が魅力的な共用の庭として扱われているユニークな作品。
駐車場の役割を兼ねた、前庭に面した住戸の開口部には全てスクリーンが下ろされているのが残念。



城郭型マンションと謳われた東京都江東区のゲーテッド・コミュニティ（総戸数 989 戸）である。

住棟の配置と塀によって周辺環境から縁を切っている中庭（広場）は住人しか利用できないという。

北欧で視察したブロックプランの集合住宅との共通点も見られる。

前面道路より、ガラス張りのオートロックのエントランス越しに子供たちが悠々と遊んでいる姿は、物流センターや団地、倉庫に囲まれた立地において異様な「格差」光景である。ブレークリー＆スナイダーの著書『ゲーテッド・コミュニティ』（竹井隆人・訳）によれば、地域のコミュニティから分断させるゲーテッド・コミュニティには問題点も多いという。

塀の内側の防犯上の問題は解決したとはいえ、犯罪が他に「転移」するだけで、塀の外側には死角が多い誰からも自然監視されない環境になってしまうからだ。

著者はこうしたゲーテッド・コミュニティを「ライフスタイル型」「威信型」「保安圏型」の 3 つに分類している。レジャー施設を併設させたもの、危険意識より保安を目的としてバリケードを事後的に設けるもの、プライドを誇示するものなど背景と内容は異なっている。それぞれが異なるコミュニティを成立させているようだ。

この住環境を冷静に眺めると、北欧デンマークで 2003 年に発表された刑務所との共通点が多い。

人間が求めてきた住環境への欲望への進化の先にあるものが刑務所であるという事実は皮肉以外の何物でもない。

周辺は危険な地域とはいえないが、自然監視の期待できない大型倉庫などの建物が目立つ。この地域の夜間人口は減少するであろう。確かに子供の遊ぶ環境はない。この特殊な住居型を実現させた理由は、こうした敷地環境にあるのだろうか。写真右はゲート横のガラス越しに内部を覗いた様子。周辺との地域格差が感じられる。

ゲートとなるメインエントランス

サブエントランスにも厳重なセキュリティが見られる

ゲートの内部は安全だが周辺は閉じているために、住戸から道路への自然監視の義務を放棄している。
ベンチこそは見られるが、そこに人を誘う工夫は見られない。

緑化された隔離塀

既存の公共児童公園は「ニュートンプレイス」の住戸が面することで自然監視されるようになっている。

東京江東区東雲に計画された公団住宅である。
6 つの建築家チームが計画に関わり、総戸数 2000 の大規模集合住宅地区である。
総合監修役を務めた建築家の山本理顕は従来の集合住宅にはない新たな試みを提案している。

S 字を描くアベニューに沿って小店舗やクリニックなどが構えている。ここは住民以外も利用できる公共の通路。通行人の動きがカーブすることで「見えるもの」「見られるもの」の変化に富み、様々な住戸から自然監視されている安心感を与える。

外壁の凹部は均質になりがちのファサードに変化を与えるとともに、一部はコモンテラスとなり、共用廊下に光を導く有効な開口部でもあるようだ。

2 階のデッキは一部が緑化されており、多くの自然監視の機会を得ているものの、デッキに面する住戸の住人に利用されている気配は無い。ここは部外者が立ち寄れる場所のため、バルコニーへの侵入対策として何らかの手段が必要と思われる。サッシュ面の後退によるバルコニーの陰影のため、侵入されると陰となり身を隠すことができてしまう。
デッキの一部には、2 階住人の専有性が感じられるような提案がほしいところである。
そうすることで部外者が心理的に立ち寄り難い空間になるであろう。

エントランスは部外者が侵入できないようにセキュリティにより守られているものの、人気の無い通路（ピロティ）や井戸底のような通過型広場も目立つ。

ベルリン「ユニテ」の中廊下
開口部が無いために暗く体感治安は悪い。

写真：『新建築』2003 年 9 月号より

建築家　山本理顕が担当した CODAN　1 街区のコモンテラスを見る。（写真右）中廊下に明るさをもたらしている。

同じ中廊下式とはいえ、コルビジェのユニテで見られる中廊下とは大きく条件が異なっている。

写真左：道内で見られる風防室を髣髴させるガラス張りのエントランスが提案されている。

通常は廊下側に配される水廻り空間であるが、ここではサンルームのような明るいトイレやキッチンの水廻りをバルコニー側に配するといった発想により実現されたというもの。

当初は公団側の反発があったとはいえ、一般人にアンケートをとったところ、多くの支持があったという。全住戸の 60 パーセントに採用され人気を博したという。

中廊下に並んだガラスの扉越しに住戸内部のプライバシーを守る「可動式のスクリーン」の位置を調整することができる。

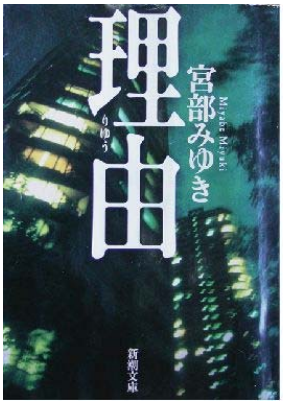
SOHO などに利用する住人は、あえてスクリーンを奥に設置し、廊下側をオープンにすることができるという。

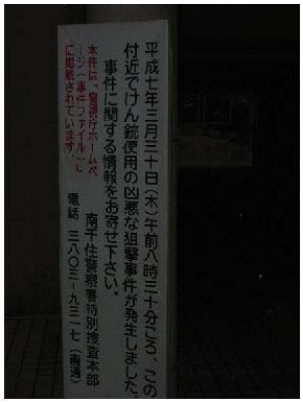
コモンテラスは匿名的な空間にならないように、そこに面する住戸だけが利用できることによって専有性を高めている。

こうした方法は部外者に心理的抵抗感を与え、防犯上も有効と思われる。

他の建築家が提案した住棟 CODAN2 街区においても外壁を穿ってつくられた「プライベートテラス」が提案されているが中廊下に採光を兼ねる目的で「閉じすぎず」に公共性が与えられている。

テラスを利用する住人は廊下より住人に見られるものの、こうした設計上の決断は防犯上有効と思われる。





本研究の動機付けとなった都内の高級集合住宅である。

この住区で生じた平成 7 年の発砲事件は記憶に新しい衝撃的な事件であった。

真偽は分かりかねるが、ここは小説家の宮部みゆきの小説『理由』の舞台になったという噂も聞こえている。小説には高層型集合住宅が抱える特徴を的確に記述しているので幾つか引用したい。

「周辺環境からの孤立」「周辺環境から隔絶したイメージ」「隣人との関係」など高層型集合住宅を異なる距離感から捕らえた表現である。

「敷地内には、法令の指定に沿って緑地帯が設けられ、児童公園や池や人工の水路が点在する。そこには栄町一帯の、零細な工場と商店と古びた一戸建て住宅が混在する居住空間から隔絶された、別天地の趣がある」

「確かに豪華は豪華だ。しかし、貴子は気に入らなかった。周辺の町の景色のなかから異様に浮き上がって見える、ヴァンダール北千住ニューシティの立ち姿が。マンションの敷地をぐるりと囲んでいる灰色の塀が。」

「ご近所の人と付き合っている暇なんかありません。気にしているゆとりもないんです。ちょうど玄関を出たところで顔を合わせたり、エレベーターで乗り合わせたりすれば、会釈くらいはします。でもその相手が、果たしてこの階の人なのか、この階の人を訪ねてきたお客さんなのか、すぐ隣の部屋に住んでいる人なのか、それだって判りませんよ。」

現実に殺人未遂事件を引き起こした集合住宅である。
東京には「同質」のマンションが多く見られるが、本研究ではこの物件を対象に幾つかの問題点を見出したいと考えた。

周囲の町の質とは温度差が感じられる。
巨大なタワーが老朽化した商店街越しに見える光景。地域コミュニティを明らかに分断している。

歩行者と車は人工地盤の広場によって隔てられている。

歩行者専用の人工地盤の広場より各棟へとアクセスする動線。
広場は総住戸数には相応しい大きさかもしれないが、明らかに人間的スケールを逸脱している。

立地する環境とはまったく無縁のギリシャを想起させるモチーフが点在することで、地域とは隔絶されていることを強調しているようだ。

住区が前述の広場によって組織付けられていない「例外」がある。
低層等はとりわけ高級感を漂わせている。
他の住棟とは背を向け、公道に並んだ門扉より直接アプローチさせる方法が取られている。
こうした姿勢がこの住区全体のコミュニティを成立させにくくしているのではないだろうか。住棟ごとに明らかな「格差」を露呈させている。

ｄ人工地盤の広場に面した住戸（2 階）のテラスを守る閉じた障壁。
プライバシーを守る目的とはいえ、広場の様子を一切「自然監視」できない。
広場から住戸の自然監視される機会も失ってしまっている。
北欧であれば、このテラスに面して住戸が開かれ、日光浴などヒューマン・アクティビティの光景が見られるところである。もっとも条件のよい住戸といえよう。
「防御」の姿勢からは何も生まれることは無い。寂しい広場である。

ある住棟の玄関ホール。人工広場からも前面道路からも他方向より自由にアクセスできる。
開放的であるが、ピロティが匿名的な空間になってしまっているようだ。

郵便ポストはアルコーブ状の死角となっている。
広場ではなく、子供たちがこの周囲で
遊んでいたのは理解しがたい。

玄関ホールより共用廊下へと至る扉

各住戸へと導く共用廊下。行く先にエレベーターや階段もある。

共用廊下と低層部の住戸ベランダはかなり接近している。
手すりを乗り越えてしまえば簡単に侵入できてしまう。さらに、共用廊下から直接公道へと接続されている。犯行後の逃避路に利用されることになるだろう。

住区へのアプローチ経路は複数存在する。
不特定多数の部外者が何ら抵抗無く敷地に立ち寄ることができる事実が、
この住環境の犯罪誘発要因となっているのは明らかである。
誰でも住人を装い、関係者を装い、一歩外に出れば雑多な環境に紛れることができるのである。

ある住等棟の低層部の様子。
1 階にはプライバシーの問題で住戸を設けていないため、多くのデットスペースが存在している。また、そのデットスペースはどんな空間で、何のための空間か、何も定義されていない。警視庁より設置された看板を見るとまさにここで発砲（殺人未遂）事件があったという。犯行後、スムースに車道に出て逃走することも可能であり、その間誰からも監視されることも無い。

ある住棟と道路との関係。誰でも誰何されずに近づくことができてしまう。

住戸より広場を見る。
いつ再訪しても人の活動が見られない。
住棟間隔があるため、広場への十分な自然監視ができなくなっている。

利便性を求めた結果か、この住棟は
いたるところで公道への抜け道が多い。
ペット等の散歩への配慮だろうか。

共用階段と住戸ベランダもかなり接近していると思われる。

住戸のエントランスは独立しているものの、凹凸の死角も多い。

住戸ベランダより下方の低層部のテラスを見る。
テラスの先端部はメンテナンス用の通路がある。業者が横切るのだろうか、ほとんどテラスが利用されている光景が見られなかった。
これが弊害となり、屋外状況（写真右の三角形の空地等）の自然監視の機会を失っていると考えられる。危険なデットスペースになる要因となっている。

東京都台東区の民間集合住宅の事例である。
10 階建て・世帯数 44 戸・築年数は 30 年程度である。
過去に幾つかの住居侵入による盗難等の被害があったという。
現在も路上生活者が共用空間に入り込むなどのトラブルがある。
（エントランスにオートロック無し・監視カメラ 2 箇所あり）
同じような空間特性を抱える築年数の近い物件が同エリアで多く見られた。
ここでは問題点を考察するものとする。

前面道路・歩道より駐車場の入口を左に見る。

エントランスより前面道路を見る。

駐車場は独立しているため、入居者以外の利用もあるという。
そのためエントランスや玄関ホールと縁が切られている。
前面道路より自然監視はされるものの、死角となる部分が大きい。

エントランスの奥行きは深く、玄関ホールに向けて大きな影を落としている。

歩道とエントランスの舗装の色調が近いために、部外者でもエントランスに立ち寄りやすい原因になっていると思われる。心理的抵抗感が感じられない。

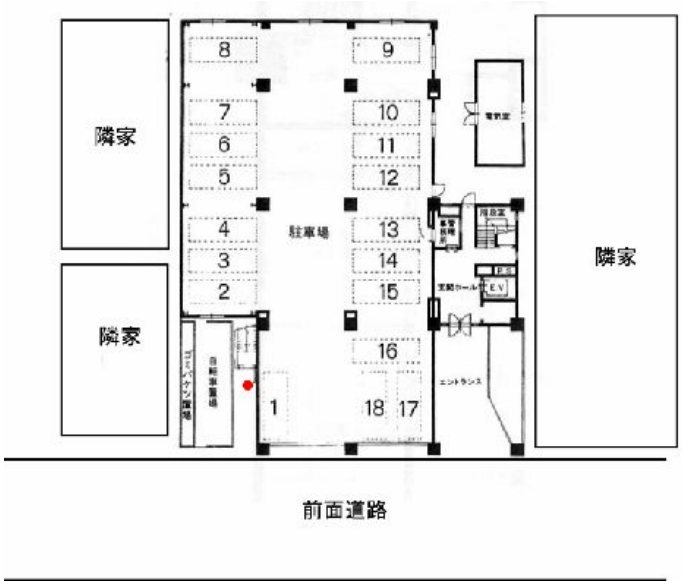
30 年前の新築時は写真右の一部分に砂利敷きの庭があったという。
現在は取り除かれているものの、玄関ホールまでのアプローチが長過ぎると思われる。
隣接するスーパーの買い物客が利用する「パブリックスペース」になっている。

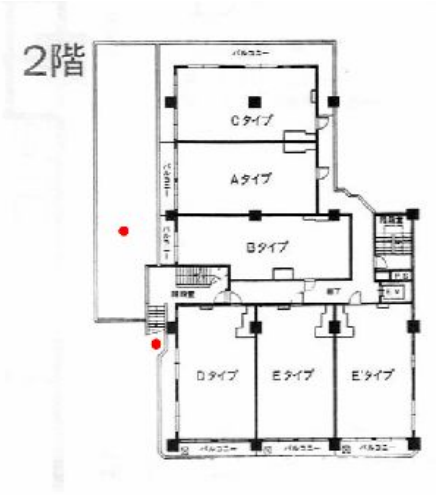
玄関ホールからの見返し日中の照度すら十分とはいえない。
レンガの色調が暗さの原因でもあるようだ。

エレベーター前は２基の監視カメラで守られている。前面道路やエントランスからの死角とはなっていない。

玄関ホールのアルコーブに納められた郵便ポスト。
監視カメラには映らない死角となっている。
外部エントランスに面する開口部が必要と思われる。こうした「改変」は建物の構造上可能と思われる。

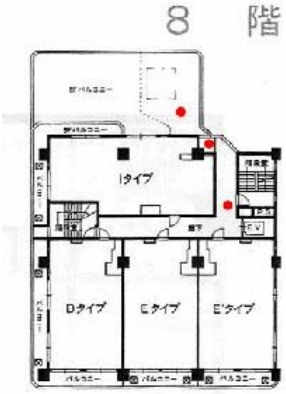
玄関ホールを経て外部に出ると自転車置き場が設けられている。駐車場に取り付いた窓も不透明ガラスのため監視障害となる。このような事例はこの年代の物件には他にも多く見られる。
犯罪企図者が身を隠したりする凹凸の隙間が多い。
駐輪のために立ち寄る児童や女性を考えると体感治安は良好とはいい難い場所であった。





非常階段に至るルートには
さまざまな死角があるようだ。

自転車置き場とごみ置き場を兼ねる独立した簡易建物の脇に階段室に至る施錠されない扉が見られる。2 階の一部の住人は、2 階階段室の手すりを乗り越え、駐車場の屋根を経てベランダから出入りするようだ。それは犯罪企図者が辿るルートとしても無視できない。
隣接する隣家も立地上、開口部が少ないために、こうした状況を自然監視することはできないようだ。



廊下より防犯格子越しにバルコニーを見る

新築時、入居が始まってすぐに住居侵入による盗難被害があったという「I タイプ」。
8 階廊下とルーフバルコニーを隔てていた避難壁を突き破り、一部排気塔（ルーフファン）の設置された大きなバルコニーより犯人は侵入したものと思われる。
住人によると（現在は転移）こうした被害は一度では無いという。
上階も同様の空間特性を持つが、鉄格子の防犯対策は廊下からの眺望が奪われるという理由で、他の住民の同意が得られず実現を阻まれたという。
建築としての魅力に十分な特性を持っているとはいえ、住戸が均質に積層されない複雑な構成を持つ集合住宅の場合、このような弊害を生じると考えられる。

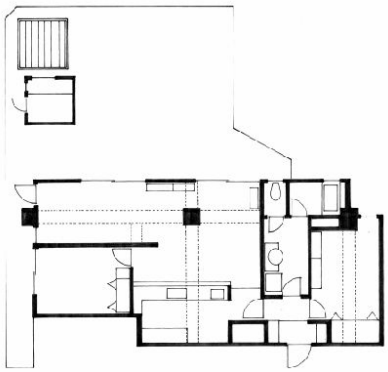
犯罪被害後に事後的に付けられた金属性の格子と扉。エレベーター出入口より見た様子。

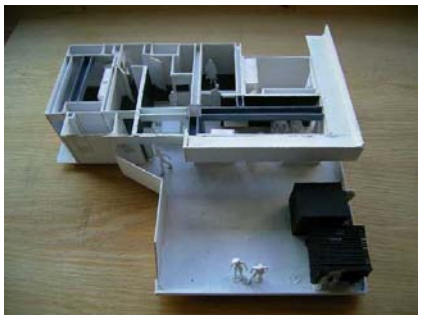
4 つの住戸の扉が並んだだけの排他的な「中廊下」の様子。ここは誰からも監視されないのだが、中廊下という半屋外の空間特性のため、人の話し声などが大きくエコーするようだ。

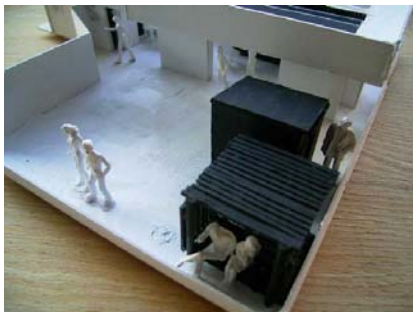
8 階の階段室
1 階の玄関ホールを経て誰でもアクセスできてしまう。
通気のために扉を開けておくことも多いようだが、野良猫も上がってくる事があったという。
不法侵入のホームレスを階段室で見かけ通報したこともあるという。

I タイプ住戸よりルーフバルコニーを見る。
犯人は避難壁を乗り越え侵入したという。

□6.2　改善提案　台東区の分譲マンション







過去に何度か住居侵入の被害を経験した築 30 年のマンションである。

均一な住戸が単純に積層せずに、ある階層からは一部住戸が向きを変えて積み重なることにより、条件の異なる共用空間やデットスペースが生じている。

集合住宅における専有空間と共用空間の線引きの曖昧さは匿名空間となってしまうことがある。このマンションにおいてもそうした場所が不法侵入されたり、軽犯罪の温床になった経緯もあるという。

ここでは使用権を与えられた住戸のルーフバルコニーにて、人の気配を感じさせる 2 つの工作物を設置することで、防犯上の効果を狙った実験的な計画である。過去にはこのルーフバルコニーの「匿名的空間」が悪用され犯罪に結びついた経緯もある。この住戸が長期不在時でもこの工作物の外灯を点灯させたり、工作物の方向を変えるなどのアイディアが実現された。

匿名な空間にヒューマンアクティビティを感じさせることで犯罪を抑止させる目的がある。

■7　北欧における調査

□7.1　デンマーク　コペンハーゲンにおける調査

キンゴーハウス（Kingo houses 1958-60）ヨーン・ウッツォン設計

この部分は近年に立ち上げられたというが、
物品盗難に会う契機を与えてしまったという。

設計当初の
塀の高さ

プライバシーを高める目的で立ち上げた壁。
レンガの色味が異なるが、濃い部分がオリジナルの高さであり、近年に高さを増した部分。

設計当初の塀の高さ。
眺望を得ると同時に、
敷地周辺の自然監視にも貢献

シドニーのオペラハウスの設計で知られる建築家の設計したテラスハウスである。

高低差のある敷地に、大きく 3 つのグループ（群）に分かれて 63 戸のテラスハウスが計画されている。

敷地の最も低いところには池があり、それぞれのグループが池を取り囲む構成となる。各住戸は、L 型平面の形状であり正方形の中庭を介して緩やかに繋がっていく。

住人の厚意により、敷地周辺を案内していただき幾つかの興味深い視点をいただいた。

・この住宅には監視カメラの設置がないこと。

・住人でない人物が散策していた場合でも、各グループが 3 つに分けられており（各 30 戸程度）、管理組合もそれぞれに異るために部外者を見分けやすいこと。（グループ化）

・盗難等の被害にあった住戸には共通点があるという。中庭の塀の高さを、過度なプライバシーを守る意向で立ち上げた 2 戸は、いずれもが盗難の被害にあっているという。こうした背景で、地元警察より、塀を高くすべきでないという指導（強制力はない）を受けたようだ。

塀により死角が発生し、犯罪企図者が塀を乗り越えて中庭に入ってしまうと、誰からも見られることはない。コミュニティの質に関わらず、隣人による自然監視の機会を失ってしまうことになる。

Kingo houses 1958-60
現在は中庭の塀の高さが上げられている例も見られる

住戸内部より隣家への自然監視の様子

1950 年代以降のデンマーク集合住宅の経緯

ヨーン･ウッツォンにより 1953 年に他の建築家と協働して最優秀となった設計競技案、「Scanian house types」がある。この作品を基に実現したといわれるキンゴーハウス 1958-60
とフレデンスボーのテラスハウス 1962-63 の影響は同世代の建築家に多大な影響を与えることとなった。

「ウッツォンのエコー（響き）」としてその後、デンマーク国内に少なくとも 3 つの大規模のプロジェクトが実現している。Ved Stampedammen Atrium houses 1965, Terrace houses i Oeverroed 1963,　Carlsmindeparken Terrace houses 1965.

こうした低層型集合住宅は、その後、約 2000 世帯の大規模な低層住宅地 Albertslund Syd Housing development,1963-68.に結びついたといわれている。これは、平屋、2 階建て、3 階建てからなる住宅地であり、中央には人工運河に沿った歩道が設けられている。なかでも平屋からなる街区は中庭を抱えたＬ型の形状をした住戸が連なる構成であり、確かにキンゴーハウスを彷彿させるが、機能的な住戸へのアクセス、プレキャストコンクリートの安価な素材、直交軸の硬い配置構成、中庭のプライバシーを高める木質フェンスの存在が、この住宅地をひどく閉じた環境としている。「グループ化」もないことから「部外者」も誰何されることはない。

ここでは玄関扉横の開口部（窓）のみが、外部環境を自然監視しているに過ぎない。
だがこの作品はデンマーク国内の「集合住宅の低層化」の潮流をつくった貴重なプロジェクトとなった。

一方で、1950 年以降のデンマークの集合住宅の方向性は、ル・コルビジェのユニテ・ダビタシオンによる影響を彷彿とさせる建築型、つまり日照や眺望、通風を全住戸に保障するという高層型集合住宅がいくつも実現している。Bellahoej の集合住宅は 1944 年の設計競技により選ばれた高層型集合住宅であり、1950 年に 5 つの住宅組合と複数の建築家によって実現された。公園の中に 8 階から 13 階建ての住棟が階段室を挟んで 2 つずつ組み合わさりグループ化され、おおよそ 60 棟が林立している。

住棟同士の間隔が広すぎないことや、透過性のロビー及び階段室、公園内の園路はゆるやかにカーブすることで様々な方向で住戸の開口部と対面し、自然監視の機会を得ている。

高層住宅のため、住棟と公園との直接的な結びつきは希薄となり、「公共的」な、誰でも入園しやすい屋外環境となってしまっている。私自身も誰何される機会はなかった。

Bellahoej の集合住宅
前面道路との植栽による隔離は最小限に留められているが、建物の輪郭が限定されていることで、外部空間との交流や住人のアクティビティは見られない。

住区エリアは前面道路からの死角、監視障害となるデザインは見られないが、住区への敷居がないために、誰でも抵抗なく入園できてしまう。緩やかにカーブする園路は人間味のある住環境であることを強調している。

住棟の足元廻りには外部空間との交流を拒絶し、ヒューマンアクティビティの機会を喪失している。

開放的なエントランスロビー

プレキャストコンクリートの無機質な表情
最小限の色彩

同質の住棟が 5 棟並ぶことで圧倒的な
存在感を放つ

Hoeje Gladsaxe.Housing development 1963-68

この住宅は、後にデンマークにおける集合住宅の軌道の行方に影響した計画である。（約2000 戸）実現は 60 年代であるが、構想は 1940 年代まで遡るという。

計画は 16 階建の住棟が 5 棟、幾つかの 9 階建ての住棟、店舗、学校、教会、運動場から成る。5 棟の高層住宅が等間隔に並ぶ佇まいはコペンハーゲンへのゲートとよばれたという。

高層棟では 1 基のエレベーターを各フロア 3 世帯がシェアすることで顔見知りの関係をつくることに成功していたが、デンマークの住宅産業の技術を前面に押し上げたプロジェクトとはいえ、工業住宅、つまり色彩はあるもののプレキャストコンクリートの安価な印象、ヒューマンスケールを超えたアクセス動線、自然監視されない無窓の壁面の連続など、移民によってゲトー化されていないとはいえ、「体感恐怖」を覚えてしまう環境であった。その恐怖は建物の構成、素材、均一性からくる心理的なものである。

まさにその問題が議論され、後に先述の建築家集団 Vandkunsten による代替案によってデンマーク建築、とりわけ集合住宅の軌道修正がなされたといってよい。

アプローチに平行して走る壁面には一切開口部がない。
退屈な連続には何も生み出す要因がない。人間性の拒絶。

エントランスの扉にはガラスが用いられ閉鎖性を避けている。
ロビー奥のオープンスペースへの扉が向き合う。
誰でも住棟内に侵入できる。

エントランスの扉にはガラスが用いられ閉鎖性を避けている。ロビー奥のオープンスペースへの扉が向き合う。
誰でも住棟内に侵入できる。

住棟同士を結ぶ歩行者通路。
閉じた壁面が人間性を超えたスケールでひたすら反復し、連続する。

敷地内にただ置いたかのように感じられる児童用の遊具。
建物からの自然監視は一切行われていない。

Hoeje Gladsaxe.Housing development 1963-68

最上階からの俯瞰
用途別に並べただけのゾーニング計画

最上階の共用廊下での監視カメラの設置

住戸の玄関
共用廊下(スペース)への監視を一切放棄している。

住戸前は障壁なしに通行可能である。
ベランダが連続している感覚を与える。
そのためカーテンで遮蔽された窓が連続している。

Bellahoej の集合住宅
建物表面に凹凸があることで外部空間へと関係する意志が若干は感じられる。

Housing development Tinggaarden.1 1978,（ 後に Tinggaarden.2 1983-84 が実現）

これは 1971 年デンマークビルディングリサーチ協会によって行われた設計競技の最優秀案である。

競技では「低層高密度住宅」が問われたもので、住人も設計段階で参加できる画期的なものであった。

先述の 2 つの同時期の計画（Hoeje Gladsaxe.Housing development1963-68 と Albertslund Syd Housing development,1963-68）によって高層か低層かの議論を「終結」させた計画である。

全体構成は 6 つにグループ化され、おのおのが 12 から 15 の住戸からなり、歩道や広場を取り囲んでいる。各グループにはコモンハウスが設けられ、会議や食事など、グループ同士の結束間を高めている。

ここでは伝統的なスウェーデンの木造建築のような親しみやすさと、様々な素材の使用による均一性が避けられている。隣人を身近な存在として受け入れ、信頼する風潮を、レンガやガラス、工業材料で見事に演出しているのである。自由な素材の使用による可能性は、先述の札幌の事例にも通じるものがあった。高層型集合住宅を仮想敵と位置づけた建築家集団の意志が垣間見れる。

窓にはカーテンもなく、ガラスの温室もあることで、様々な大きさの不規則な開口部からの自然監視を体感した。私が視察の際も、住人との「アイコンタクトの機会」が多く、住区全体に監視されることとなった。子どもの遊具等も各グループから自然監視される、見通しのよい場所に設けられていることが確認できた。

デンマークの住環境の方向を定めたプロジェクトであることが多方面から確認できた事例であった。

グループ化される配置方法

異種の素材の組み合わせが住区全体の均質性を回避。
強い意志の計画性を感じる。

道内でみられるガラスの風防室のような要素デザイン。

さまざまな方向に向き合う開口部より体感監視・体感視線が感じられる。
私も住人より挨拶される機会があった。
住区が住人全体に守られている意識が、遊具の配置にも見て取れる。
落書きの類も一切見られない。

カーテンは引かれているものの、歩道に面して開口部が大きくとられることで、歩行者よりも住人の優位性が優っている。
カーテンの引かれない窓も多い。(撮影不可)

The Tingbjerg housing scheme 1950-71
Architect: Steen Eiler Rasmussen

著名な計画家によるプロジェクトである。

デンマーク在中の人物より、近年に社会問題の背景となっている集合住宅があると情報提供をいただいた。少年によるバスへの投石も多いことから路線ルートを変えたという。デンマークでは珍しい話である。この住区計画は商業施設や学校などを含んだ小さな街として計画されたものの、現在は非行が問題となりゲトー化したようだ。

近年に建て壊しの計画もあったそうだが、週末にもクラブ活動を行うことで治安を回復させたという。

移民が多く、落書きの放置も目立つ。監視カメラの存在は確認できなかった。

住区が単調にならないために、さまざまなタイプの住棟が計画されている。

街路から住戸を隔離させるような閉じた印象を抱く。

街路から住戸の人の気配は見られないと同時に、街路を自然監視している気配もない。

街路に対して住戸の優位性は限りなく低く、防衛の姿勢を保っているよう。

徒党を組んだ少年たちが街路をうろついていた。

住棟全体が周辺に多くの死角を生産している事例。

エントランスの扉にはガラスが用いられているものの、自然監視される機会がない。

まるでシャッターのような開口部

住棟の型と形状には変化があるものの、外部環境との接触は感じられない。

最小限の開口部

□7.2　デンマーク　ユトランド半島における調査

デンマークのユトランド半島　第二の都市オーフス郊外に浮かぶ孤島にある 17 世紀の民家である。

現在は個人住宅及びゲストハウスとして利用されている建物である。私も滞在経験を持った。

ここでは北欧の民家における伝統的な構成がとられている。

前面道路と敷地境界付近に不整形の石が並べられ、私・公の領域の違いを暗示している。

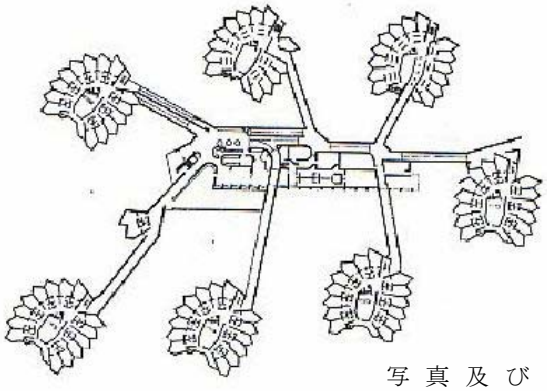
ここでは防犯上の生垣や門扉などは一切見られない。

建物はハーフチンバーの工法であるが、正面、背面、側面ともバランスよく窓が配されている。

伝統的な砂利敷きのアプローチ（ポーチ）が玄関前の中庭まで続いている。

訪問者の足音が響くことで、物品盗難などの犯罪を抑止する効果的方法であると考える。

メンテナンス上の問題はあるものの、北欧では現代の住宅地においても散見できる方法である。



写 真 及 び 図 面 ：『 AARHUS　ARKITEKTURGUIDE 』
（ARKITEKTSKOLEN I AARHUS）より

BOERGLUM KOLLEGIET,1967

これはデンマーク第二の都市オーフスの学生寮である。

フィンランドの建築家　アルヴァ・アアルトの有機的な作風を髣髴される作品である。

エントランスや共用施設を含んだ低層棟より、半屋外の廊下を経て各住棟（計 7 棟）にアクセスするといった明快な構造をもつ。

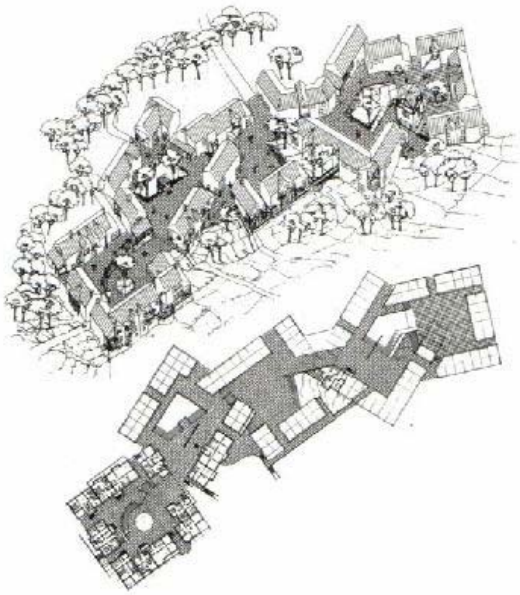
各住棟は 4 層構成であり、各フロアー中央には共用のキッチンとリビングルームが設けられ、周囲に個室が取り囲んでいる。公的な空間から半公的へ、さらに私的空間にかけて空間がグラデーションのように変化していく。デンマーク国内の幾つかの学生寮を見学してきたが、個室同士が無関心に孤立しているケースも多い。この事例ではこの建築構成が誘発する確かなコミュニティが感じられた。

学生寮の共用のリビングルームは時にあまりにも公的な空間になりやすい。

部外者であるゲストは抵抗無く入室できたり使用できたりする場合があるが、ここでは空間のスケール感とクラスター単位とのバランスの良さがあいまって、良好な住環境であるといえる。

屋外環境における活用のアイディアは見られないものの、住棟間隔も離れすぎておらず、互いに自然監視できる状況にある。

一般の集合住宅においてそのまま転用できることは考えられないが、コミュニティを築きつつ防犯上の効果を上げるという点で参考になる事例と考えられる。

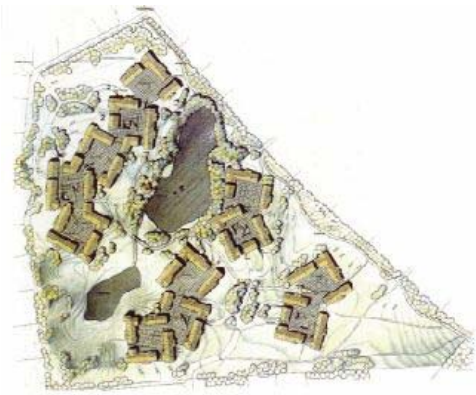


図版：『屋外空間の生活とデザイン』（鹿島出版会）より

Sandbakken housing complex, 1988-90

1972 年の著書『まもりやすい住空間』で知られるオスカー・ニューマンは防犯住宅の条件のひとつに、住民同士の顔見知りの機会を創出することにより部外者の存在を判り易くさせることの重要性を挙げている。住区全体を幾つかの単位でグループ化し、住人、自が帰属する「領域性」を与え、「専有性を感じられるような半公共空間」を住棟配置の工夫で実現させる方法は、この作品に端的に表れている。こうした空間は部外者が気軽に立ち寄ることを躊躇させるため、匿名性の空間となることを避けるうえで巧みな方法であり、デンマークにて広く普及している。

一方で、こうした広場は単に設ければいいというだけでなく、住人による滞留時間を生じさせ活気あるもので無ければならない。このあたりの研究は J・ゲール著の『屋外空間の生活とデザイン』（鹿島出版会）で論じられている。



写真・図版：Jutland Architecture Guide(The Danish Architectural Press)より

SKJOLDHOEJ KOLLEGIET, 1973

デンマークのオーフス郊外に立地するおおよそ 1000 戸からなる学生寮である。

ドミトリータイプ、個室、カップル用、家族用とタイプは異なるものの住棟のデザインは統一されている。中央には管理機能やスーパー、託児所などが配されている。

全体にバランスよく自転車置き場やランドリー、コミュニティルームが住棟の一部に組み込まれている。

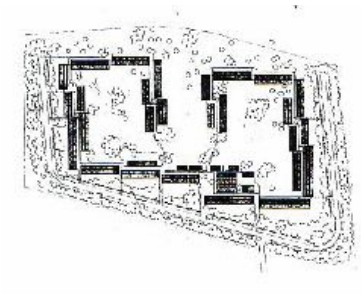
各住棟は 3 層構成であるが、盛土による共用広場から見ると 2 層に見えるのが特徴である。

ここでも幾つかの軽犯罪が生じている。

まず駐車場が住戸から離れているため車上荒らしの問題がある。

次に、住民の多くは広場に面した建具をサブエントランスとして利用しているが、錠は設けられていないために買い物や洗濯などで住人が一時でも不在時に犯罪企図者が入り込み、物品を盗むことが問題となっている。広場面積は大きいため住棟には十分の日照と通風が得られるものの、専有意識は生まれにくい。広場を横切る人物も誰が住人で誰が部外者であるか見分けにくい問題がある。ドミトリータイプの共用リビングに入り込んだ者が、誰にも誰何されずに電化製品を盗むという事件も報告されている。

グループの最適単位も再考されるべきである。



図面：『AARHUS ARKITEKTURGUIDE』（ARKITEKTSKOLEN I AARHUS）より

複数の住棟が大きな共用広場を取り囲む構成。

住棟に挟まれた部分に歩路が巡り、各住棟へのエントランスがここに面している。

住棟の間隔が離れているために居室からの自然監視はされにくい。

共用広場の面積が大きいために専有意識は生じないものの、屋外活用は頻繁に見られている。

緩やかに起伏のある広場
ペットの行き来も見られ、レクリエーション
でも使われている。

居室より共用の広場越しに他の住棟を見る。
この開口部より屋外に出ることができる。
施錠はできないものの、多くの住人が出入り
している。
右には FIX の透明ガラスが嵌められている。

広場より住戸を見る

メインエントランス側を見る
駐車場は敷地周辺に設置されているため、徒歩によるアクセスとなる。
オートロックの扉の横には大きなガラスが設けられている。
上部の住戸の窓より、訪問者や通行人を自然監視することもできる。

□7.3　その他地域の調査

ユニテ・ダビタシオン　ベルリン
ル・コルビジェ設計　1956 年

窓周りディテール

ピロティ

建築周辺の環境
住戸からの見通しの悪い林のなかに
遊歩道が伸びる

中廊下

この集合住宅は一つの都市であり、幼稚園や店舗などを併設した集合体である。

この建築の建築史上の功績はあまりに大きい。本研究が取り上げる北欧デンマークや日本においてもその影響は例外でない。

周辺環境の鬱蒼とした林へ遊歩道が続いているものの、住戸からの見通しはすこぶる悪い。これはデンマークのゲトーと同種の問題である。当時画期的であった建築の発明、ピロティにおいては、住戸から一切「自然監視」されることはない。地域に開放的で、誰でも抵抗無くアクセスできるため、子どもの遊び場として利用されるのであれば無視できないであろう。

住戸は二層構成（メゾネット式）のために住戸は両面に視界が開けているが、一方で中廊下には開口部が無く殺風景な印象である。天井に取り付いた蛍光灯の白々しい仄かな照度のなかで人気のない玄関戸が均質に並ぶだけの排他的な光景である。改善すべき課題が多く残されている。

バルコニー周りにはカラフルな色彩が見られるが、この方法は北欧、及び道内の公営住宅などで見られる。プレキャストのチープな印象をなんとか払拭させる付け焼刃の方法のようだ。

ドイツ　ベルリンの事例

「IBA ベルリン国際建築展 1987」開催時に建設された
建築家：マリオボッタによる集合住宅

ポストモダニズムの功績

角地に建つ建築の特性を上手く取り入れている建物である。
規則的に穿たれた住戸の窓が印象的である。
角地に対面する大きな開口部にガラスを使うことで前面道路からの視線を受け入れており、閉鎖的印象はない。レンガという重厚な素材、シンボリックでモニュメントタルな2 本の円柱、対称形の構成が、ある種の威厳「dignity」を与えている。
こうした威厳性は特定の人物のみを受け入れる集合住宅という建物においては部外者の立ち寄りを躊躇させる意味で、防犯上の有効性があると思われる。
市民を広く受け入れる公共建築などでは、この種の「威厳性」の有無、必要性には意見が分かれるところであるが、わが国の集合住宅にはこうした「威厳性」が求められているのではないだろうか。

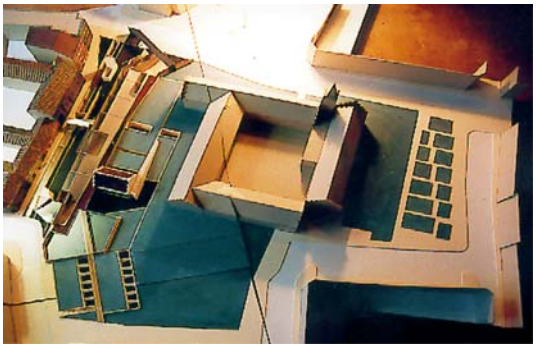
ノルウェー　ベルゲンの事例

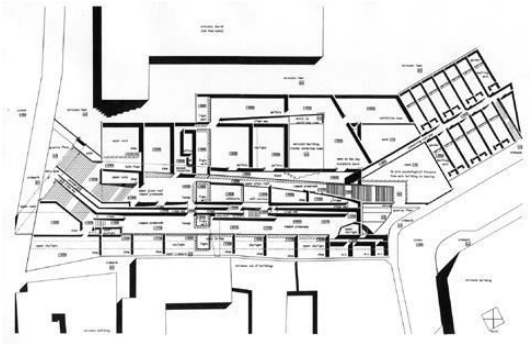
都心部のレストランの例
公園道りに面した大きなガラスの開口部に注目したい。内部の利用客の要望だけ考えるのであれば、閉じた壁のほうが「落ち着く」であろう。
ガラスには透過率を下げる処理が施され、街への介入への義務が遂行されている。北欧でのこれらの態度は、集合住宅、戸建住宅にも反映されているのであろうか。

街角の自然監視を逃れる空間より(以下写真 3 枚とも)
北欧の中で比較的体感治安のよいノルウェーにあっても、自然監視されない場所、監視障害を生じている場所では落書きが目立つ。
「割れ窓理論」によるとこうした無秩序が無秩序（犯罪）を呼ぶという。

□7.4　改善提案１　オーフス市　聖母教会広場における防犯建築の提案

Klostergade Complex Project, Denmark, 2001
アルコール依存症による犯罪地域における複合施設の提案
オーフス市　デンマーク





アルコール中毒者が集い傷害事件が多発していた教会前広場は、中毒者の「無目的な滞留空間」を許す空間的要素が犯罪を引き起こす原因となっていた。

防犯上、壁の落書きを取り除き、既存の面的な空間特性をもつ広場に対し、線的空間によって建築を計画した（店舗、学生寮など）。

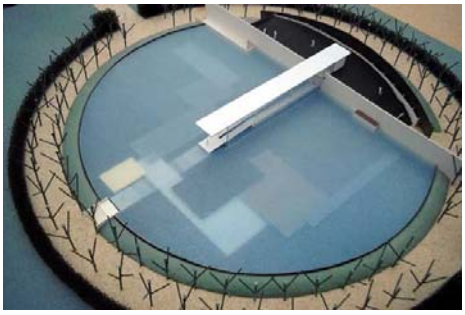
人の流れを誘発することで無目的な滞留を避け、犯罪を防ぐことを意図した建築提案である。

幾つかの歩路、プロムナードには十分な照度を与え、死角のない空間造りが工夫された。

□7.5　改善提案２　オーフス市　植物公園の防犯建築の提案

デンマーク　オーフス市の植物園に隣接した自然公園では、夜間における婦女暴行の事件が頻発していた。木造風車や緩やかな園路、ブロンズ像、ベンチなどが見られ、自然に恵まれた牧歌的な公園環境であるが、夜間の人通りは少なく、死角となる空間やあまり利用されない円形の駐車場はどこからも自然監視を逃れており、体感治安は良好ではない。

この計画はロンドンにみられる「公園の中のアートギャラリー」を参考に、建築を計画することで、公園内に新たな人の流れとヒューマンアクティビティ（滞留空間）を実現させることで防犯上の効果を目指した計画である。



□7.6　改善提案３　オーフス市　新興住宅地における戸建住宅

デンマーク　オーフス郊外の新興住宅地に計画した戸建住宅である。

比較的治安のよい住環境であるが、新しい住宅地のためコミュニティが十分に成熟しているとはいえない。この住宅地は袋小路の採用により車の通り抜けをでき難くしているものの、周囲の住人もたびたび交代しており、部外者も見分けにくい弊害となっている。近年には電気機器の盗難や空巣などもみられるという。

デンマークの住宅設計においてもわが国同様、間取りの形式化により、おおよそのパターン化が見られる。大手住宅メーカーの普及により、この住宅地においても似通った家を多く見ることができる。こうした住宅は建物のつくられ方に表・裏があり、どちらかは閉じた印象を与える。

角地に建つこの住宅は、敷地に小さな公園が隣接することで不特定多数の人が関わる環境といえよう。家の周囲から周辺環境を自然監視できるように、どの面も閉じた印象を与えない設計が試みられている。周辺環境を見守ることに責任感を持つ姿勢は建物の表面からにじみ出るのであろうか。住居侵入の被害にあった周辺住民は犯人に遭遇したことに怯え、通報を求め駆け込んできたこともあるという。

周辺環境を自然監視する家は、建物に表・裏の表情を持たず、周辺から内部の間取りを把握させない「混乱性」も実現している。

■8　北海道の新開発計画における提案と考察
旭川市「北彩都あさひかわ」開発における提案

旭川で現在工事が続いている「北彩都あさひかわ」とよばれる新開発エリアでは鉄道によって長年の間南北に分断されていた鉄道を高架化し新たな2本の橋を架けることで、両者を繋ぐ再開発である。都市部が北東方向にのみ発展してきた偏りを軌道修正することを意図しており、新駅舎を中心とした、南東方向への市街地拡大も目論まれている。

市内に分散していた官庁施設を集約化させることで「活性化の核」となり、駅前の賑わいを取り戻すことが期待されている。

新駅舎を中心とした計画によって、日本発の歩行者天国である買い物公園通りの景気復興にも期待がかかり、現駅舎の後退によって生まれた空地を含んだ駅前広場を計画することで、煩雑であったバスの発着場を統合し町に秩序を与えることが予想される。

旭川市都市建築部駅周辺開発課整備推進係発行のリーフレット「北彩都あさひかわ」によると整備方針が4つ挙げられており、その実現が期待される。

「鉄道の高架と、忠別川を横断する南北道路を整備します」「旭川市発展のための新しい機能を取り入れます」「忠別側の環境を活かした新たな都心を作ります」「賑わいを創出する都心部を作ります」

図版：「都心ルネッサンス　北彩都あさひかわ」より

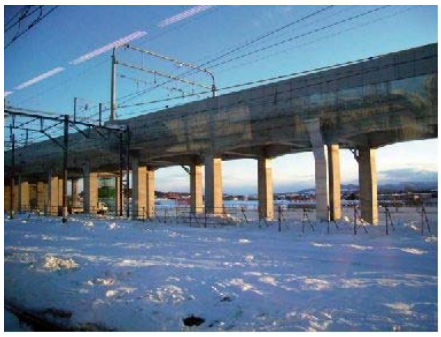
再開発には、当然と副産物が生まれる。ここでは「高架下」に注目したい。

東京を第2の拠点とする私には高架が周囲に与えるネガティブな要因を無視できないでいる。夜間、高架に沿って帰宅することは怖い。巨大なスケールと無味乾燥の景観、暴力的な動線の強制は人に恐怖心を与える。

米国にありがちな自然公園のどこまでも続く並木道やトンネルなども同じような心理にさせられる。人間が本能で感知する体感治安について旭川市の精神科のドクターによると、「自分が自由にならない強制された空間」に恐怖を感じるのは動物的な本能であるようだ。人間の心理行動を研究するのが本研究の目的ではないが、こうした「体感治安」の悪い「高架下」に建築を計画することで町を救済する計画を、東海大学芸術工学部　藤森研究室にて旭川出身の所属学生が主導で取り組んだのがこの計画である。

これは高架下建築への一般解ではなく、サイトスペシフィックな提案である。東京、とりわけ神田、有楽町、上野などでは高架下の飲食店が賑わっている光景を目にすることが多い。テナント料も高額だと聞く。しかしこのような提案を北彩都の高架で行っても人の密度が足りないためにその効果が期待できない。ここでは地元大学が連合を強める現代の傾向を鑑みて、「学生寮」を提案することとした。

居住性を問わない活気ある学生のアクティビティを宗谷線の幅広の高架下の虚無地帯に提案することで町に活気を与え、高架で翳る周辺環境の自然監視力を高めることを期待した。川沿いに飛ぶ単線の富良野線の高架下にはパブリックな性格の店舗、カフェ、ギャラリーなどを配し、市民が立ち寄れる機会を設けた。通常は駅務室や倉庫、駐車場などが無責任におかれる場所だが、こうした「計画されない空白」へのオルタナティブとして捕らえている。



現状写真

高架下に計画した学生寮
学生の活気ある生活が、高架によって体感治安を悪化させる周辺環境を監視するという試み

千葉県船橋市
高架の下を通行する場合の心理的な圧迫感「体感治安」を改善させる目的で柱には色彩が施され、一部天井のコンクリート面を波打たせる工夫が見られる例。「人間的スケール」を与えることで施術前との違いが体感できる。

■9　研究を通しての考察及び展望

敷地に規格化された住宅を等間隔に「布置」しただけの住区例。
屋外環境に対する定義・アイディア・処置を放棄しているため、ヒューマン・アクティビティが発生しない。生活の方向が均一であり、隣人との関係も期待できない。互いが互いを遠ざけ無関心を装う。
デザインの力によって改善が期待できよう。

北海道には犯罪の存在しない孤島があるという。
フェリーが寄港すると、警察官や島の関係者が出迎えるという。
習慣のはじまりの契機は不明であるが、防犯上の効果もあるだろう。
一時の観光客と島民の顔合わせの機会は、都心の集合住宅における「住民同士が挨拶する風習」が犯罪を抑制するという現代の常識に酷似している。

六本木ヒルズ
レジデンス棟を見る

ゲトー化した集合住宅
デンマーク

道内に移住して 2 年が経過したが、数ヶ月間留守にすると私の東京の自宅ポストには、ほぼ同じような新築マンションのチラシが異常な量、一方的に詰め込まれている。この圧倒的な量を目にすると破る気力も喪失させられ、思考停止状態になる。押し付けられるのはチラシだけでなく、「日本のすまいの価値観」そのものではないか。こうしたマンションは日本の集合住宅の様式として依然として常識となっている。どれも気が滅入る建物ばかりである。

昨年、研究室の数人の学生（北海道の出身）と共に東京を見学した時、はじめて路上生活者を見たというのには驚いた。旭川や札幌では、どこまでも直交する街路が水平に伸びていく。計画によってコントロールされた意志の先には、余剰物や誤差を産み落とさないという清潔な結果がある。本研究での私の関心は、道内のこうした「人工的な街区における住環境」へ向けられたといってよい。私が道内に移住した当時、市街地に無批判に置かれただけの凡庸な戸建住宅と集合住宅を前に、これを北海道の住まいとして到底受け入れることができなかったのである。

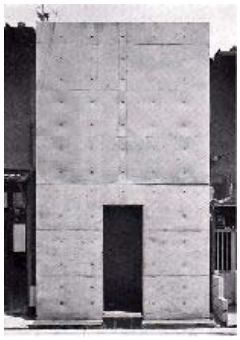
本研究が取り上げた北欧デンマークでは近年、建物の物理的な寿命には問題ないが、取り壊しが検討されていた住宅地域がある。非人間的な計画法で、スケールで、屹立する建造物は周囲に体感治安の悪化を引き起こしていた。犯罪の温床になったり、スラム化するなど、もはや安全で良好なすまいの環境とはいえない。

デンマークでは 1968 年の「学生の蜂起」の影響や、国から独立した自治区である特殊な村の影響ですまいの方向性が軌道修正された経緯がある。建築家も住人の連帯感を生むような設計方法が工夫されてきた。これには本研究で取り上げた「キンゴーハウス」(Kingo houses 1958-60）の影響が強いことを数々の文献や現地の建築家の意見から知ることになった。ここには監視カメラの類は一切無く、デザイン要素の工夫と住戸の配置方法によって住人の気配を演出しながら生活が展開するという日常生活の確かさが感じられた。これは北海道にて十分に展開できる住環境の可能性であった。別のデンマークでの事例「ティンゴーン」(Housing development Tinggaarden.1 1978）においては、住棟の配置方法に加え、使用する素材と色彩の多様性により均質な工業化住宅への批判ともいえる「人間らしさ」を表現し、建物の表面に凹凸のデザイン要素（バルコニーや出窓等）を工夫することで「多方向」からの能動的な住人の視線で通行人を見守るとともに、注意深く部外者を自然監視していた。ここでは屋外環境を無人化させずに、遊具やベンチの巧みな配置によって「人間のアクティビティ」を発生させる設計上の工夫も多々見られた。環境を守ろうという住人の責任感は建築設計と結びついており、すべてが偶然によるものではなく、計画によるものであったといえよう。研究を通して断定できるが、こうした環境では必ず私も住人に誰何されたのである。

他方、デンマークにおいて「ゲトー化」している住宅環境においては、堅牢な外壁面で周囲から閉じ、住人の生活感を一切外部から感じさせないものであった。屋外においては通行人や部外者、場合によっては犯罪企図者に空間支配の優先権を与えてしまっていた。なんのためらいも無く自由に行き来できるのである。これは The Tingbjerg housing scheme 1950-71 や Hoeje Gladsaxe Housing development 1963-68 に集中表現されていた。

わが国では「隣人を泥棒と思え」といわんばかりの隣人疎外型マンションが増えてきている。建築空間の支配力を利用し、隣人との関係を無力化させているかのようでである。北海道においても同質のマンションを多く見かけるようになっている。

ナチスにより造られたデンマークの要塞

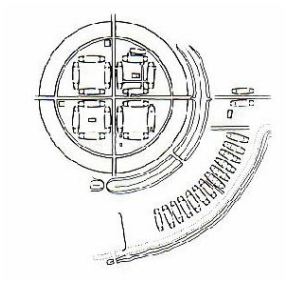


「住吉の長屋」
写真：『現代の建築家　安藤忠雄』（鹿島出版会）より

新聞広告より。
周辺環境から孤立した住宅の佇まいは、現代人の気風を表現しているのだろうか。
まるで小さなゲーティッド・コミュニティのようでもある。

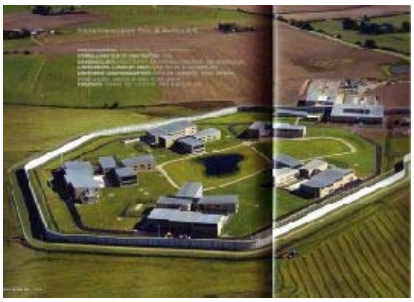
米国で展開されている「ゲーティッド・コミュニティ」とは住区全体を塀で囲い堅牢なゲートを設置し、防犯カメラや幾重ものセキュリティに依存した住まいの様式である。住人だけに限定した安全な広場を内部に抱えている事例はわが国でも幾つか実現していた。こうした住環境では周辺環境に危険な死角を生み出している弊害が見られた。いずれ塀の外の地域に犯罪が転移するのではないだろうか。幸い道内には未だ実現していないものの、監視カメラで守られた住宅地の事例は見られたのである。防犯機器は依存性が高いことで知られるが、本研究を進める中で、地域のコミュニティのなかで安全を守り、住人が周辺環境を守るという義務と責任を放棄しないことが住人の幸福度を保障していることを実感した。視察しての印象だが「ゲーティッド・コミュニティ」の塀の中が生み出すものは住民の疎外感ではないだろうか。そのためだろうか、皮肉なことにその姿は「刑務所」とどこか似ている。たどり着いたすまいの先にあるものは、ねじれた幸福論かもしれない。

研究過程で提案した「旭川の高架下における住環境」は、こうした無責任な住まいの代替案として、体感治安の悪い環境を「見守る住環境」として、多少エキセントリックな形でまとめたものである。



バイキングの要塞　デンマーク
円形を描く塁と堀に囲まれた内部に木造家屋４棟がペアとなって 4 つのグループを成している。おおよそ 1000 年前といわれる。

図版：新聞広告より
道内初のセキュリティタウン



図版・写真『dk ARKITEKTUR 2008-1』　（Arkitektens Forlag）

デンマーク　ホーセンス郊外の刑務所
住棟まわりに一部の要素さえなければ、まるでレクリエーション広場に恵まれたゲーティッド・コミュニティのような構成が見られる。

次世代の住環境を考える場合、わが国の紋切り型マンションを、批判的視点を欠いたまま無責任に引き継いでいいのだろうか疑問が残る。また、わが国では道内も例外ではなく、数十年前に前衛建築家らが提案したような周辺環境から隔離したと捉えられる戸建住宅が展開している。トレンドのように不動産広告には「端的に閉じた箱」のイメージが印刷されている。過度に防犯を謳うものも多い。破ったチラシはリサイクルされ、再び同じような図像が印刷されていくのだろうか。住宅環境を舞台とする犯罪の場合、わが国では設計者の責任は追及されないことに甘んじてはいけない。

今後も同テーマでの研究や調査を継続していきたい。北欧・デンマークと気候と文化の共通点が見られる北海道において東京の病理を道内に持ち込まないで欲しいと考えているからである。

「森山邸」設計：西沢立衛
ひとつの敷地にオーナーの住宅と親友の住宅、友人に賃貸する計 6 つの住戸されている複数のボリュームが立ち並び、それらの隙間も屋外環境として住人に活用されている。
住戸同士の窓は向かい合わないものの、互いに緩やかな自然監視が行われている。

■10 参考資料

□10.1　参考文献リスト

法務総合研究所『平成 21 年度版　犯罪白書』太平印刷社、平成 21 年 11 月
J. ゲール、北原理雄訳『屋外空間の生活とデザイン』鹿島出版会、1990 年
J. ジェコブス、黒川紀章訳『アメリカ大都市の生と死』鹿島出版会、1977 年
五十嵐太郎『過防備都市』中公新書ラクレ、2004 年
渡辺真理＋木下庸子『集合住宅をユニットから考える』新建築社、2006 年
中西崇『住まいと防犯住宅』週刊住宅新聞社、2005 年
Richard H.Schneider and Ted Kitchen、防犯環境デザイン研究会訳
『犯罪予防とまちづくり』丸善株式会社、2006 年
エドワード・J・ブレークリー　メーリー・ゲイル・スナイダー、竹井隆人訳
『ゲーティッド・コミュニティ』集文社、2004 年
湯川利和『不安な高層　安心な高層』学芸出版社　1987 年
オスカー・ニューマン、湯川利和訳『まもりやすい住空間』鹿島出版会、1976 年
湯川利和『まもりやすい集合住宅』学芸出版社、2001 年
イアン・コフーン、ピーター・フォーセット共著、湯川利和監訳『ハウジング・デザイン理論と実践』、鹿島出版会、1994 年
フーベルト・ホフマン、北原理雄訳『都市の低層集合住宅』鹿島出版会、1973 年
山本俊哉『防犯まちづくり』株式会社ぎょうせい、平成 17 年
中村攻『子どもはどこで犯罪にあっているか　犯罪空間の実情・要因・対策』昌文社、平成 12 年 3 月
宮部みゆき『理由』新潮文庫、平成 16 年
ローランス･デベック＝ミシェル、清水敏男訳、『岩波　世界の巨匠　ホッパー』岩波書店、1994 年
『新建築』2003 年 9 月号、新建築社
「デンマークモダンハウスの最盛期」『SD』、鹿島出版会、1996 年 9 月号
チャールズ・ジェンクス、竹山実訳『ポストモダニズムの建築言語』株式会社エー・アンド・ユー、1978 年
ル・コルビジェ、樋口清訳『ユルバニスム』鹿島出版会、1967 年
黒沢隆『近代時代のなかの住居』リクルート出版、1990 年
『現代の建築家　安藤忠雄』鹿島出版会、1982 年
『ARKITEKTUR DK 4　2009』ARKITEKTENS FORLAG, 2009
『ARKITEKTUR DK 1　2008』ARKITEKTENS FORLAG, 2009
Olaf Lind,Annemarie Lund『Copenhagen Architecture Guide』The Danish Architectural Press,2005
Olaf Lind『Jutland Architecture Guide』The Danish Architectural Press,2002
Olaf Lind『Architecture Guide Danish Islands』The Danish Architectural Press,2007
Mogens Brandt Poulsen, 『AARHUS ARKITEKTURGUIDE』ARKITEKTSKOLEN I AARHUS,1999

Joergen Sestoft,Joergen Hegner Christiansen,『DANISH ARCHITECTURE 1900-1960』ARKITEKTENS FORLAG, 1991
Kim Dirkinck-Holmfeld,『DANISH ARCHITECTURE 1960-1995』ARKITEKTENS FORLAG, 1995
Nils-Ole Lund『NORDIC AECHITECTURE』ARKITEKTENS FORLAG, 2008

□10.2　その他の参考資料等

旭川市駅都市建築部駅周辺開発課「都心ルネッサンス　北彩都あさひかわ」整備計画の概要とまちづくりのイメージ・13 号
北海道立北方建築総合研究所「やってみよう！子どもの安全安心まちづくり」
東海大学芸術工学部・北海道東海大学芸術工学部「Graduation Works 2009」
北海道大学放送教育委員会編「北海道の住まい　環境の豊かさを生かす」